

---

# 天使の残像

河野 る宇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天使の残像

### 【Nコード】

N6518S

### 【作者名】

河野 る宇

### 【あらすじ】

＊記憶の中のお前は笑う。「あとはまかせた」——そんな言葉が聞こえてくるようで私は自然と笑みをこぼした。

※小説サイト「野いちご」にも投稿させていただいている作品をまとめたものです。一部「でじたる書房」にも出展しています。

## \*依頼

「ベリル・レジデント……？」

「そう、彼を捕まえてください」

新米ハンター、ライカ・パーシエルの元に1人の男が依頼を持ちかけた。暗めのスーツに身を包みサングラスをかけている。

新米といっても年は27歳。ブラウンの髪は肩まであり青い瞳に彫りの深い顔立ち。草色のミリタリー服にタクティカルベストを合わせた恰好だ。

一人前になったのはつい2年前である。

ハンターとはアメリカならば本来、借りた保釈金を返さずに逃亡を図る者の事である、が世界的な裏の世界の意味合いは少し異なる。主に依頼を受けてその対象を捕える者の事だ。相手の生死は依頼主の意向になるべく沿う形で行われる。

善悪はハンターのスタイルに委ねられる処だが、ライカは「正義のハンター」をうたい文句に活動していた。

「ふーん」

ライカは渡された写真をマジマジと眺める。金の髪はショートで明るい緑の瞳の青年だ。自分より少し年下かな？

「こいつが何か悪い事でもしたのか？」

悪人には見えないが……

「ええ。そうなんです。もう極悪人で、我々も手を焼いているのですよ」

“新進気鋭の星”と呼ばれるあなたに是非彼を捕まえてもらいたい。

男はライカを褒め称える文句をまくしたてた。ここまで言われて悪い気はしない。ライカはニンマリした。

「で、いくらなんだ？」

「前金で1万アメリカドル。引き渡し時に5万」

それにライカは口笛を鳴らした。随分な額だ、よほどの悪人らし

い。

(作中でのレートは1アメリカドル＝90円)

「奴の消息は逐一、あなたにお知らせします。引き受けてくださいますか？」

ライカはしばらく考えたあと問いかけた。

「俺に依頼するくらいだから、やっぱり強いのか？」

「そうです。奴は傭兵としても一流で、その技術を悪い事に使っているのです」

「へえ」

そんなに悪い奴なのか……ライカは眉間にしわを寄せた。

「お願いできますか？」

悩むライカの顔をのぞき込む……

男は部屋を出てドアの向こうで待っていたもう1人の仲間に戻るように促す。

「引き受けたんですか？」

待っていた大柄の男は出てきた男に声をかけた。

「ああ、快くな」

細身で長身の男がニヤついて答える。

「捕まりますかね」

「どうだかな。奴が調子に乗るタイプで良かったよ」

いくら新米ハンターでも、慎重なタイプには依頼を持ちかけにくい。

「まったく。なんだってボスは今更、奴に狙いを付けたかね……」

長身の男が溜息混じりにつぶやく。大柄な男はそれに無表情に応えた。

「誰も狙わなくなったモノに興味を示す悪いクセをお持ちですから」  
そんな言葉に眉をひそめて長身の男は言い返す。

「興味を示さないんじゃない。興味を持ったって仕方ないからだ」

奴は『呪いの宝石』だ、遠くから眺めるだけに限る。男たちは肩

をすくめて車に乗り込んだ。

## \*不確かな気配

アメリカ合衆国ユタ州にある小さな街で、青年はオレンジレッドのピックアップトラックから降りて雑貨屋に入る処だった。

北にアイダホ州とワイオミング州があり東にコロラド州、西にネバダ州、南にアリゾナ州と接している州だ。

「おい！」

「ん？」

青年は大声で呼び止められて振り返るとそこにいたのは青年には見覚えのない男の姿。

「おまえ、ベリル・レジデントだな？」

「そうだが私に何か用かね？」

落ち着き払った青年に戸惑いながらも男は応える。

「俺はライカ。ハンターだ。おまえを捕まえに来た」

「理由は？」

少しも驚かないベリルを怪訝に思いながらもライカは睨みを利かせて説明した。

「おまえの悪行に捕まえて欲しいと依頼があった！」

「……悪行？」

青年の表情に初めて変化が起きる。端正な顔立ちから表される感情はライカの神経を逆なでする。

これはある意味、妬みのようなものなので仕方がないといえるだろう。

「大人しくしろ」

「……」

警戒しながら近づいてくるライカを見つめる。あと数メートルという処でベリルはニヤリと口の端を吊り上げた。

「捕まる気はない」

「！ なにっ!？」

見上げるエメラルドの瞳にライカは一瞬、ゾクリとした。

「！ 待て！」

その隙を突いてベリルはピックアップトラックまで駆け出し素早く乗り込んで走り去る。

「……」

制止を聞かずに去っていく車の後ろ姿を見送ってライカは苦い表情を浮かべた。

「なんなんだあいつ……」

ライカはブラウンのハンマーでターゲットの後を追う。自分より若くて細身に惑わされたが、足は速いのだと実感した。

「俺が何も反応出来ずに逃げられた」  
小さく舌打ちする。

「次は逃がさん」

こっちには追跡して知らせてくれる人間がいるんだ。逃げても必ず追っていく。

ライカは口角を上げて鼻を鳴らした。

## \*ライカ再び

それからおよそ1週間後——アメリカ合衆国、ネブラスカ州。

アメリカ中部の州で州都はリンカーン。北にはサウスダコタ州、東はアイオワ州とミズーリ州、西はワイオミング州とコロラド州、南はカンザス州に接している。

「見つけたぞ！」

「……」

オレンジレッドのピックアップトラックから降りてすぐライカが声を張り上げてベリルを指さした。

ベリルは改めて男を見つめる。

サンドカラ砂漠色のミリタリー服に身を包み彫りの深い顔立ちは厳<sup>いか</sup>つい。ベリルよりも身長は高く体つきもガツシリしていた。

とは言ってもベリルは174？と小柄な方だが、傭兵として己の能力を活かすためトレーニングは欠かさないのでと窺える体格である。

ハンターならばある程度、相手の力量を読む能力にも長けていなければならぬのだが……

「誰に頼まれた」

「言える訳ねえだろ」

ライカは逃がさないと強調するように体勢を低くして視線を外さない。仕方がないというようにベリルは目を閉じて小さく溜息を吐き出した。

「後悔するなよ」

「!？」

発して目を開いたその瞳にライカは一瞬、体が強ばる。先ほどまでは違う強烈なまでの存在感に足を踏みしめた。

「やっぱ止めた」

「! えっ!?! まっ……!?!」



突然の爽やかなベリルの笑顔に調子を崩したライカを見て再び車に乗り込んで走り去る。

「……うそ」

再度、置いてけぼりにされたライカは上げた手の先の車を呆然と見送った。

<また逃げられたのですか……>

「隙を突かれたんだ」

電話の向こうの依頼主に発する。

<仕方がありませんね。奴の居場所が解ったらまた連絡します>

「頼むな」

電話を切ってハンドルを握る。ブラウンのハマーはゆっくり動き出した。

「くっそ」

2度も逃げられてライカは苛つく。

「次こそは絶対に捕まえる！」

そんな決意を胸にハマーを走らせるのだった。

## \*対峙

「今度こそ逃がさねえ！」

「なかなか根性があるじゃないか」

指を差して怒鳴るライカにベリルは薄笑いで応えた。

ここはアメリカ合衆国、アイオワ州。トウモロコシの生産量が全米トップという29番目の州だ。

ユタ州からネブラスカ州、そしてアイオワ州と移動した自分にちやっかりついてきたライカに多少は感心した。

ここはアイオワ州の町外れ。寂れた町さびの一角で人もほとんど見かけないほどの場所だ。

「1つ聞きたい」

「依頼主は言わねえぞ」

「私の何を聞いて依頼を受けた」

「え……っとそれは……えーと？」

そういえば……具体的な事は聞いてないな……ライカは思い返して眉をひそめる。

「ほう……」

ベリルはそれに目を据わらせた。

「詳細も調べぬまま相手を捕えようとするなどハンターとしては失格だ。出直して来い」

「！ な、なんだよ、えっらそーに！」

「文句があるなら言ってみろ」

「ぐっ……っ」

もはや何も言えなくなったライカを一瞥し、ベリルは深い溜息を吐き出す。その姿にライカはカッとなってハンドガンを取り出した。「そんなもん！ おまえを捕まえてから調べればいいだけの事さ！ 悪人だと依頼があったって事はそれなりの事はしてきたって事だろ！」

「……」

あまりに突拍子もない言い分にベリルは再び溜息を吐く。

「それでよくもハンターなどと言える」

「いいから大人しくし……うっ!？」

持っていたハンドガンが弾かれ、その衝撃からの痺れに手を押さえた。そしてその目に銃口を向けているベリルの姿が映る。

「? いつの間に……」

「貴様の求めるハンターとはなんだ」

問いかける瞳が冷たくてライカはゾクリと体を強ばらせた。

## ＊浮かび上がる面影

「金か」

「違う」

「名声か」

「違う！ 俺は……悪い奴をやっつけるために……」

「では、罪もない者がもし何かの策略で悪しき者として依頼されれば貴様は捕えるのか」

「……っ」

その問いかけにライカは言葉を詰まらせる。

「噂というものは本人に関わりなく広まる事もあるのだ。それを何の根拠もなく疑うというのは人としても間違っているのだと知れ」  
言いながらハンドガンを脇に仕舞う。

「あんたは……そんな事が言えるほど罪が無いっていうのかよ」  
傭兵のくせに！

「私には私の背負う罪がある。悪しき者を捕えるという貴様にも罪があるように」

「！」

その言葉にライカは何故か一瞬、顔を引きつらせた。

「貴様の求めるものが嘘ではないのならば私は貴様に捕えられるような罪は無い」

「う……くそっ」

ライカは何も言えずに頭（こぶし）を垂れる。

「もう一度お前が目指すハンターを考えろ。でなければまた同じ過ちを繰り返す事になる」

自分よりもやや身長が低く細身のベリルがライカにはとても大きく見えた。今まで気がつかなかったその存在感に見入ってしまう。

「左に監視がいる」

「！」

「顔を向けるな」

言われてライカは目だけを左に向けた。ビルの影に暗いスーツを着たサングラスの男がいる。

「私を捕えて研究するつもりなのか売り飛ばすつもりなのか……訊いてみるか」

「え？」

聞き返したライカの目に映ったのは、鋭い眼差しでサングラスの男に素早く駆けていくベリルの姿だった。

「はええ……」

「!？」

男は低い体勢で駆けてくるベリルに驚き、思わずハンドガンを手にする。

「遅い」

つぶやいたベリルに引鉄ひきがねを引いたが、銃弾は虚しくコンクリートの地面に当たるだけで迫り来るベリルの足を止める事は適わなかった。

「!？　ぐあっ！」

男の持っているハンドガンを蹴り飛ばし回し蹴りを食らわせる。

「ふむ……」

つぶついた男を見下ろし、ベリルは小さく溜息を吐き出した。

「……」

ライカはその姿に呆然と立ちつくす。彼の中にある記憶がベリルの動きとリンクした。

「オヤジ……」

口の中でつぶやいたその言葉は悔しさも秘めていた。

## \*互いの知人

「……ふむ」

縛り上げた男を見下ろしベリルはしばらく考える。

「金は持ってなさそうだな」

「は？」

聞き返したライカに目を向けずベリルはしゃがんで男と目を合わせた。

「さてと。組織の名は言ってくれそうにないな」

「……」

当然だとも言うように視線を外す。

「まあ良いが。突き止められないとは思わぬ事だ」

言いながら後ろ手にはめていた手錠を外した。

「どこへでも行くがよい」

「！ 逃がすのかよ」

「痛めつけるのは苦手でね」

ふらつきながら車まで戻り、走り去るセダンを見送りながらベリルは発する。

「どうせ奴が教えてくれる」

「？」

携帯を取り出したベリルをいぶかしげに見つめた。

「信号が止まったら知らせしてくれ。発信ナンバーは――」

それだけ言って通話を切る。

「もういいぞ」

ライカに言って車に戻ろうとした。

「あんた……なんで狙われてるんだ？」

「本当に何も知らないで依頼を受けたのか。高額ではなかったかね？」

「！ ああ、うん」

「知らないならそれで良い」

「な、なあ！」

車に乗り込もうとしたベリルを呼び止める。

「あんた……その動き誰かに教わったのか？」

「？ 何故だ」

「……俺の知り合いに似てるんだ」

少し言い出しにくそうに発して視線を外した。

「基本的な格闘技は昔に学んだが誰にも教わっとらんよ」

「そうか……ならいいんだ」

「よくセシエルに似ているとは言われるが」

「！」

「奴を知っているのか」

驚いた顔をしたライカに向き直る。

「俺の……育ての親だった」

その言葉にベリルは切れ長の瞳を丸くした。

「セシエルは今どこに？」

問いかけられてライカは喉を詰まらせ声を低くする。

「死んだよ……2年前に」

「！ そうか……」

ベリルは目を伏せてつぶやいた。

「俺のせいなんだ……」

「！」

悔しげに発したライカを見つめて数歩、近寄る。

「良ければ話してもらえないだろうか。奴の最期を」

「……っ」

静かな問いかけにライカは眉をひそめた。

## \*その心を知る者

「俺……10歳の時に捨てられたんだ」

「！」

2人は落ち着いた場所に移動し、ベリルの車の中でライカは口を開く。

「オヤジに拾われて、初めはハンターなんて知らなかった」

後部座席に並んで腰掛け、ベリルは足を組んで苦い表情を浮かべるライカの横顔を見つめた。

「俺もいつかオヤジのようなハンターになりたくて……でも俺の先走りのせいでオヤジは死んだんだ」

どうしてあの時、指名手配犯がいる事を先に知らせに行かなかったんだ……どうしてあの時、オヤジが飛び出したときに俺も一緒に闘えなかったんだ……！

「足がすくんだなんて言い訳だ！ 俺は……」

「クク……」

「！ 何がおかしいんだよ」

喉の奥から笑いをこぼしたベリルはライカはギロリと睨み付けた。

「奴が死んだのは2年前だと言ったな。それならば歳は55か」

「それがどうした」

「私と出会った頃のような動きは出来なかったろう」

「！」

「奴は最期に笑っていたのではないかね？」

「！？ なんて……それを」

驚くライカから視線を外しベリルは宙を見つめた。

「奴の死はお前のせいではないよ。今しか出来ぬ事をしただけだ」

若い頃のような闘い——あの駆け抜ける快感を最期にもう一度……それがセシエルの最期の願いだったのだ。

「あんた……オヤジといつ会ったんだ？」



静かにそう語ったベリルの横顔を見つめライカはつぶやくように  
問いかけた。

## \*破られる事の無い約束

「奴が37だったかな」

17年前か……

「じゃああんたが子どもの時に会ったんだな」

「あの時は30だったと」

「……は？」

「私は30だったよ」

顔を見合わせてしばらくの沈黙――

「冗談だろ？」

「本気だ」

「じゃあ今50だっていうのか」

「うむ」

「ふざけんなよ……」

ライカは呆れるやらムカツクやらで眉間にしわを寄せる。

「セシエルは本当に約束を守ったのだな」

ベリルは目を細めてつぶやいた。

「！ 約束？」

「私は不死なのだよ」

「はい……？」

しれっと発せられライカは一瞬、固まる。

「ミッシング・ジェムという言葉は？」

「！ それはタブーの言葉だってオヤジに教えられた」

「なるほど、そういう言い方をしていた訳か。意味は知っているか」

「……あんまり」

ベリルは小さく溜息を吐き出した。

「人類の歴史においてあってはならない存在の事だ。私は不死のミッシング・ジェムなのだよ」

「……ホントに？」

「奴は決して口にしないと約束した。どうせ時間が経てば広まる話だというのに」

呆れた奴だ……とベリルは笑って発する。

「しかしな……」

ライカに視線を向けて肩を落とす。

「2年もハンターをしていて私の事を知らぬというのは珍しい」

「え……あ……」

ライカは頭をポリポリとかいて誤魔化すように苦笑いを浮かべた。

「そうか……墓まで持って逝ったか」

ベリルはささやくように発した。

「……」

その姿はとても儂く、印象的な瞳が水中に輝くエメラルドのように揺らめいてライカは喉を詰まらせる。

俺の知らない絆がそこにはあるようで……どうにもならない苛立ちが心の奥に積まれていく。

「なんだってあんたを捕まえろなんて……」

依頼を思い出してライカはつぶやいた。

「不死の人間がいるのだ、調べたくもなるというものだろう」

「ああ、そか」

他人事のような口調に少々、呆れながらも納得する。そしてその慣れた物言いに眉をひそめた。

「……ずっと狙われてきたってことか？」

「最近ではお前のような新米をその気にさせてよこしてくる事が増えた」

小さく笑って応える。

「！ お、俺は確かに一人前になったのはこないただけど15の頃からオヤジとずっと過ごしてきたんだ！」

「側にいるだけでは知識を得た事にはならんよ。身につける意識が無ければね」

私から見ても前はハンターとしての知識を得ているとは思えん……

…ベリルは彼の目を見て言い放った。

「……っ」

ライカは言葉を詰まらせてうつむく。

「！」

ベリルが何かに気づいて反応した。バックポケットから着信を振動で伝えている携帯を取り出す。

「……そうか。詳細はメールで頼む」

言って通話を切る。

「？」

「元を叩かんな」

首をかしげているライカにニヤリと笑って応えた。

「え……？」

## \*バカはバカ

その言葉の説明もなく帰されたライカだが、依頼の件はどうしようかと考えていた。

「やっぱキャンセルとして報告するか……」  
携帯を見つめてつぶやく。

「……」

しばらく携帯を見つめた。

「明日……でいいかあ」

と携帯をポケットに仕舞う。どう言ってキャンセルすればいいのか解らずに先に延ばす事にしようだ。

そもそも嘘でベリルを捕まえさせようとした相手が悪い！ と腹立たしげにハンドルを握る。

そう言ってキャンセルすればいいと思うのだが、彼にはその頭が無かったらしい。

次の日――

「あれ？ 出ないぞ」

ライカは依頼をキャンセルするため依頼主の男に電話をかけていた。

留守電に伝えて切ろうかとも考えたがこちらの怒りも伝えておきたくて何度もかけ直す。すると……

「あ、やっと通じた。おい――」

<ライカか>

聞こえた声にギョツとする。

「!?!? なんであんたがそこにっ?」

<キャンセルは必要無い>

「……なんで」

嫌な予感にライカは相手の応えを待った。

<FBIに連行される処だ>

「!? マジでっ!?」

<彼らは州をまたいで大麻密売組織だったようですね。殺人も何件か犯している>

「どうやって突き止めたんだよ」

<襟の裏に発信器を仕掛けた>

「!」

あの時に捕まえてすぐに解放した奴か……それで何もしないで逃がしたのか!

発信器の信号は衛星を持つ(こっそり借りている)会社に辿らせてそこから組織を調べ仲間を集めて攻撃を仕掛けた。

「……」

ベリルの鮮やかな行動に声も出ない。

<そういう事だ>

切られた電話を手にはライカは呆然とした。

それから数日後――

「お願い、彼を捕まえて」

「……」

女性に見せられた写真に眉をひそめる。

「理由を聞かせてくれないか」

ライカの問いかけにその女性は彼を見上げて目を潤ませた。腰までの栗毛は緩くカールされていて、艶を帯びたグレーの瞳がライカを誘うように揺らめく。

「この男は私の恋人に酷い事をしたんです……」

「! ベリルが?」

「!? 知っているのですか?」

「いや、まあ……そんなに詳しく知ってるわけじゃ……」

「あなたはこの男の裏の顔を知らないんです。自分に刃向かう相手には容赦なく攻撃をする……私の恋人もこの男にちょっと反発した

だけなのに……っ」

「そんな風には見えなかったけど……」

ライカがぼそりと言うと、女は目を伏せ涙を拭っていた顔をパツ上げて目を吊り上げ発した。

「あなたは騙されているだけです！ レンドルはまだこの男に付けられた傷が治らず時々、痛々しい顔を見せるんですよ」

再び顔を伏せて涙を流す。

「……」

ここまで言われてどうしようかライカは悩んだ。

「で、また来たのか馬鹿者が」

「ごめん……」

ばつの悪そうにしているライカにベリルは腕を組んで呆れた。

## \*それは運命か

「今度はなんと言われたのだ」

「えと……」

ライカは言い出しにくそうに語り始めた――

そうして一通りの説明を聞き、ベリルは頭を抱え溜息を吐いてライカを見つめる。

「……それを信じた訳ではあるまいな」

「そ、そんなワケねえだろ！」

ライカは否定するがその目は微妙に泳いでいる。

「で、でもよ……あんなの女の人があんたを狙うってのは組織とは関係ないんじゃないのか？」

「それは私に何か非があるとでも言いたいのか」

「!? そ、そんなこと言ってねえって！」

どうだか……ベリルは目を据わらせて男を見やった。

「私を狙う理由は様々だ。組織だけとは限らん」

「じゃあ彼女にもそれなりの理由があるってことか？」

「それは自分で調べたらどうだ」

質問したライカに睨みを利かせて発する。

「それはそうだけど……」

「……」

これでハンターだというのだから呆れたものだ……ベリルは声を小さくしたライカに溜息を漏らす。

「！」

ベリルが何かを感じたように険しい表情を浮かべた。

「西から何か来る……」

ぼそりと発した言葉にライカは周りを見回した。

「西ってどっちだ」



「……」

その言葉にさすがのベリルも声を無くす。

「北を指してみろ」

「え……」

しばらくの沈黙――

「もう良い」

ベリルは苦笑いを続けるライカに眉をひそめピックアップトラックに向かった。

「え!?! 待てよ!」

「お前と遊んでいる暇はない。プレッシャーが来る」

「? プレッシャー?」

運転席の下にある予備のカートリッジを取り出しポケットに収めていくベリルを見やり問いかける。

「多くの敵意を感じる。お前は離れている」

「!?! それって俺の受けた依頼でか?」

冷静に準備を続けるベリルに驚きライカは声を上げた。

「お前が受けようが受けまいが来る者は来る」

「……俺」

顔を伏せて今にも泣き出しそうな顔をしているライカに溜息を漏らす。

「私の車の中にいろ」

「お、おう」

ライカが後部座席に体を滑り込ませたと同時に何台もの車のエンジン音が耳に聞こえてきた。

「……」

ベリルは持っていたハンドガンを仕舞い近づいてくる数台の車を見つめる。

草色のジープが2台と黒いリムジンが1台。ベリルの10mほど手前で止まり男たちが出てきた。

「!」

黒いリムジンから出てきた人物に車の中で見ているライカはハッとした。依頼してきた女性だ。

女はベリルを確認するとくびれた腰をくねらせて近寄る。

「あなたがベリル・レジデント……」

「そうだが」

空気が張り詰める――暗いスーツを着た男たちはすぐにも武器を取り出せるような体勢をとっていた。

「大人しく来てもらえるかしら」

「理由によってはね」

「あなたの不死が必要なのよ」

「名を聞いて無かったな」

女はそうだったと思い出し口を開いた。

「シャロン・リッツバークよ」

「恋人が私に倒されたとか」

しれっと発したベリルにぴくりと眉を動かす。

「それでもしないとあなたを辿れなかったのよ」

「出るな！」

「!？」

カチャリと音がした方向に目を向けずベリルは声を上げた。車から出ようとしたライカはその声に体を強ばらせる。

ベリルは少し後ろに意識を移しシャロンに向き直った。

「お前の言葉は聞き入れられない」

「!」

女は目を吊り上げる。

「まだ理由を言っていないわ」

「ライカを殺すつもりなのだろう」

「!？」

聞こえたライカは目を丸くして窓から外を覗く。見えた女の顔がベリルの言葉に嘘ではない事を示していた。

「そうよ」

観念したように言い放ち、それが合図のように男たちは武器を手にした。

その銃口はベリルの車に――

「わあっ!？」

俺は死ぬのか!？ ライカは両手で頭を守るようにしてくるまっ  
た。

「あわわわっ」

響き渡る銃声に声が震える。数十秒ほど銃声が続き撃ち尽くした  
ように銃撃はぴたりと止んだ。

「……あれ？」

ライカは痛みがない事に気づいて頭を上げる。

「!」

窓のガラスさえ割れていない事に驚きベリルの背中を見つめた。

「……防弾？」

「この車は特別仕様でね」

怪訝な表情を浮かべる女にベリルは薄笑いを浮かべた。

「! 待ちなさいっ」

さっさと車に向かうベリルを制止するがその歩みは止まらずに車  
に乗り込んで走り去る。

## ＊お前の仕業か？

「おい……いいのかよ」

後部座席にいたライカが後ろを見て発する。

「名前は聞いた」

「！」

また情報屋を使うのか……ライカは気づいて納得した。

「死にたくなければ私に関わるな」

「！」

「この車でなければお前は死んでいた」

言われて目を伏せる。

「ハンターも辞めるんだな」

「！？　なんだと？」

そこまで言われるとは思わなかったライカは目を吊り上げた。

「方角も掴めない場の状況も把握出来ないではハンターとして失格だ」

「……っ」

ライカは喉を詰まらせる。それでも絞り出し声を震わせながら発した。

「こっ、これでも2年もハンターやってたんだぞ！　失格なワケない」

「お前が今まで受けていたのは全て仲介屋を挟んでものだろう」

「！？　なんでそれ……っ」

「その仲介屋はセシエルからの馴染みだ」

お前に出来るレベルの仕事しか紹介しない。ベリルは淡々と言い放った。

ベリルは接触した者については基本的に調べるようにしている。ライカの事を知れば知るほどに頭を抱えずにはいられなかった。

「お前のしてきた仕事は猫の使い程度だ」

「そこまで言うっ!？」

「セシエルは人に何かを教えるのが下手だったのだろう」  
懐かしい感覚に目を細めてつぶやく。

「それでも積極的に学ぶ姿勢の者ならば何かは学んだはずだがね」  
「何がだめなんだよ……わかんねえよ」

ライカは苦い顔をして目を伏せる。

「学ぶ姿勢からやり直せ」

そう言ったベリルにライカはガバツ！ と顔を上げて怒鳴るように発した。

「だったらお前が教えろよ!」

「!」

涙目になっているライカをバックミラー越しに見つめ当惑する。

「そんなに言うんだったらお前がっ！ 俺にっ！ 教えろ!」

「……何故そうなる」

さすがのベリルも眉間にしわを寄せた。

「俺はオヤジの跡を継ぐんだ。辞めるなんて嫌だ」

その意識だけは褒めてやるがね……心の中でつぶやき再び溜息を吐く。

「断ったらどうする」

「無理矢理にでもついていく!」

冗談じゃない……切れ長の瞳を丸くした。

「覚悟はしておけ」

「おう!」

胸を張って応えたライカに呆れる。

これはお前の仕業かセシエル……フロントガラスから覗く空を一瞥し目を据わらせた。

まるで何かの導きのようにライカは大した怪我もせずベリルまでたどり着いた。その導きを引き離すまいと、見えない何かが工作しているように感じられてベリルは薄笑いを浮かべる。

## \*見えた真実

アメリカにある大きな病院——その3階にある個室。

機械が定期的な音を淡々と響かせるその横でベッドに横たわる人物の手を握りうつむいている女性がいた。

「……レンドル」

上げた瞳から涙が頬をつたう。

「！」

そんな女性の前にあるドアが静かにスライドした。

「！？」

入ってきた青年に思わず立ち上がる。

「どうして……っ！？」

ベリルとライカに目を丸くしたあと、ギロリと睨み付けた。

「……」

シャロンの前にあるベッドにベリルは目を落とす。そこには男性が眠っていた。つながれている装置で意識が無い事が解る。

「レンドル・シャプナー。仕事中の事故で意識不明か」

つぶやいたベリルを凝視してシャロンは諦めたようにパイプイスに腰を落とした。

「そうよ……意識が戻らないまま5ヶ月が経つわ」

疲れたように深い溜息を吐き出す。

「私を捕えた処で彼は救えない」

「！」

聞きたくない言葉が耳に響きシャロンはギュツと<sup>まぶた</sup>瞼を閉じた。

一筋の希望があるのなら——彼女は調べ尽くしてベリルにたどり着いたのだ。目の前にいるベリルは無表情にシャロンを見下ろす。

「私の知人に専門がいる」

「！」

「カルテを見せてもらった」

「……」

カルテを見て解るの……？ 淡々と応えるベリルに声が出なかった。

「お前の知る処は他言無用だ」

「……そうでしょうね」

シャロンは肩を落とし、か細く発する。

ベリルの存在は表の世界には決して知られてはならない……そしてそれを阻止する者も少なくはなかった。

彼の傭兵としての力を求め、彼の存在に救いを感じている者は組織や団体、国に至るまで様々だ。

多少の犠牲を払ってでもベリルを守ろうとする力は大きい。

「可能性を捨ててはいけない」

「彼は……目を覚ますでしょうか」

ベリルがつぶやくように発すると彼女もか細く返した。

「出来るだけの協力はしよう」

「……っありがとう」

「あれでいいのか？」

病院を出てライカが問いかける。

自分を捕まえようとした相手なのに助けるような事をした事に驚いた。

「彼女なりの前に進む力だったのだよ」

ベリルは病院の入り口に目を向けて発する。

そうしてピックアップトラックに乗りエンジンをかける。

「……」

その助手席でライカはベリルの横顔を見つめた。

相手を許す心を持っている——ライカは育ての親であるクリア・セシエルの姿と重ねて、詰まる喉にキュッと唇を噛んだ。

「ライカ」

「!? なに？」

突然呼ばれて声が裏返る。

「これから空港に向かうがどっちだ」

「え……」

ライカは半笑いのまま固まった。

「空港はここから西にある」

「西……」

答えられないライカにベリルは深い溜息を吐き出した。

「こんな奴をどうしろというのだ……」

出来れば放置してやりたい。どこかで死んだとしても私の知った事か！

しかし彼はセシエルの忘れ形見のようなものだからこのまま死なれても後味が悪い。眉間にしわを寄せベリルは再び溜息を漏らした。



## \*エピローグ

「教えればいいんだろう？ ああ、やってやるよ」

ベリルはかつての盟友の墓の前に立ち、肩をすくめて空に声を張り上げた。その手にあるのは花束ではなく……

「ライカは本当はハンター向きではないのだろうか？ だから奴にはほとんど自分の知識を学ばせなかった」

それでも彼はセシエルの意志を継ごうとしている。

「お前はズルいな。何も言わずに私にそれを押しつけた」

ライカの運を試したのか？ お前はとことん人に教えるのが下手なようだ。

『死ぬ前にベリルに出会えば彼に学べ』

セシエルは無言でライカにそれを伝えた。

「最後の最後まで私を楽しませてくれるよ」

ベリルは苦笑いで墓を見つめるとつぶやくように発する。

「……っ」

そうして持っていたナイフを振りかざし墓石に傷跡を残した。

「そんな綺麗な墓はお前には似合わない」

闘いの証——ベリルはセシエルの墓にそれを刻みつけた。

## \*プロローグ

誰にでも「憧れ」というものがある。それに出会ったとき、道は大きく変わるのかもしれない。

その道が正か邪か——それはたぶん本人の判断に委ねられる処だろう。

人は誰かと出会い、その心を変化させていく。己のために、誰かのために……その目的は様々だ。

そして絆は生まれていく。

時には途切れ、時には強くなり……不思議な運命に導く事がある。絆は生まれ続いていき、後に受け継がれていく。

ベリルとセシエルの絆はたった2度の出会いでその結びを強くした。

絆はライカとの出会いを生み、その流れがいかなる運命を引き起こすのか……それは誰にも解らない。

## ＊聞き分けのない弟子

「なんだとおー!？」

爽やかな朝に大声を張り上げる男。ライカ・パーシエルはベリルから聞いた言葉に抗議した。

ここはオーストラリア連邦ノーザンテリトリー準州の首府であるダーウィンにあるベリルの自宅。オーストラリア大陸北側のチモール海沿いに位置する街だ。

「なんで俺は留守番なんだよ!」

リビングで優雅に紅茶を傾けているベリルを見下ろし、全身で怒っている事を表す。

「今回の仕事は少々、危険だ。お前に構っている暇はなさそうなのでね」

真横に立っているライカを見上げてしれっと言いつつ放った。

「なんで危険だって解るんだよ。まだ詳しい内容は聞いて無いんだろ」

「だからだよ」

「？」

首をかしげるライカにゆっくりと言いつつ聞かせるように説明した。

「電話で大体の話も出来ないという事はそれだけ危険かややこしい内容という事だ。直接話す事で難しい依頼も頼み込む事が出来る」

仲間たちの命も守らなければならない。

「……」

そう言われてしまったのはこれ以上何も言えない。

ライカは悔しさを噛みしめてベリルの右斜めにある1人掛けソファにドカッと腰を落とした。

「で、どれくらいなんだよ」

「南米に2〜3週間ほどかな」

「! そんなに!？」

「その間の仕事は頼んである」  
猫の使い程度の仕事をね。

「！」

皮肉交じりに言ったベリルをギロリと睨み付けた。  
「そういう事だ。大人しくしている」

## \*軽い復讐

数日後――準備を済ませて出かけるベリルの車を見送り、家の中でブー垂れる。

「チェ……」

舌打ちしてソファに寝転がった。

「！」

そんな時、ライカの携帯が着信を知らせる。

「はい……あ、ハミルか。どうしたんだ？」

何度か会った事のある相手にライカは顔をほころばせた。

「え？ 手紙？ 俺からの紹介で？」

しばらく聞いたあと電話を切ってニヤリと気持ちの悪い笑みを浮かべた。

「うくく……ざまあみろってんだ」

ライカはそう言って2階の自分の部屋に行き手紙を書き始める。

俺を置いてった恨みだ受け取れ！ とニヤけながらしたためて封をした。すぐにポストに向かい投函する。

これで断れないぞ、俺以外のお荷物を背負いやがれ。

「お荷物……」

自分で思った事に半笑いになった。

「俺もお荷物だっていま自分で言ったようなもんじゃねえか……」  
ライカは1人ソファの背に手を突いてうなだれる。

「とにかく！」

振り払うように頭を振って拳を握りしめ、キッ！ とやや上を見上げて発する。

「少しは苦勞すりゃいいんだ！ これでまた1人お荷物が増えたぜこのやろう」

そこでハタと気がつく。

「あれ……？」

そうすると俺と2人になる訳で……俺に専念してくれなくなるのか？

「なんか墓穴掘った感じ？」

## \*少年

「弟子にしてください！」

その少年はベリルの前に立ち声を張り上げた。

肩までのシルヴァブロードは柔らかく、赤茶色の瞳はその魅力を最大限に引き立たせていた。ブラウンのカーゴパンツに厚手の白いシャツは草色のベストと合わせた恰好だ。

「……」

まだ幼さの残る顔立ちに眉間にしわを寄せた。

「あっ!？」

真剣な面持ちの少年を一瞥しスタスタと歩き始める。少年は慌ててその後をついていった。

「ついてくるな」

「でっ、弟子にしてください……」

「私は弟子はとらない」

言い終わらないうちに少年の言葉を切る。

依頼を受けて南米に来たベリルが歩いていると後ろから呼び止められて振り向くと少年が立っていた。

何かを期待するような眼差しを向け発した言葉が……

「あなたがあの“悪魔のベリル”ですよね！　お願いです僕を弟子にしてください」

と屈託のない顔で言われ啞然とした。

「いくつだ」

いつまでもついてくる少年にベリルは小さく溜息を吐き、ぶっきらぼうに問いかけた。

「15です！」

「若すぎる。あと10年したら来い」

「10年したら25じゃないですか！」

なんだかんだ理由付けて断ろうとしても無駄ですからね！　と少年は勢いよくベリルに紙切れを渡した。

「……？」

怪訝な表情でベリルはその紙切れを受け取る。

『そいつ俺の知り合いの子供。てな訳でよろしく　ライカ』

「……」

それにベリルは頭を抱えた。

留守番をさせた事に腹でも立てたのか？　こんな嫌がらせじみた事をするとは……

「有名な傭兵の弟子になりたいって言ったら。あなたを紹介されました」

ベリルは深い溜息を吐き出す。

「何故、傭兵になりたい」

「格好いいから」

言われた言葉に呆れた。

「嘘をつくな。私に嘘は通用しない」

「！？」

少年は驚くと視線を泳がせて応える。

「……初めから、あなたに狙いを付けていました」

「どこで私の名を聞いた」

「父やその仲間から」

「名は？」

「ダグラス・リンデンローブ」

それにベリルは少し反応する。

「リンデンローブ……ハミルか」

「そうです。父の名です」

「奴とは10年ほど顔を合わせていない」

「みんな、あなたの事を必ず口にします」

「だから何だ。褒めても何も出んぞ」

しかめっ面を崩さないベリルに少年は立ち止まり、むくれて声を



上げる。

「みんなあなたはとても気さくな人だと言ってたのに！ そんな態度は酷すぎます」

そんな少年にベリルは溜息交じりに発した。

「それも時と場合による」

私は弟子は取らない。ベリルは再び言い放った。

ライカも弟子と言えば弟子かもしれないが、長く置いておく気は無いので今はまだ彼の中では弟子ではない。

「ハミルも何故止めなかった」

「あなたの処なら安心だからと」

「……」

聞いて手で顔を覆う。どいつもこいつも……

「私は子守じゃないぞ」

「あなただって、15でこの世界に入ったんでしょ？」

ベリルはそれに怪訝な表情を浮かべる。少年は勝ち誇ったような顔をした。

「あなたの事はちゃんと調べてあるんです」

「お前と一緒にするな」

言って再び歩き出す。

## \*騒動の予感

「みんなあなたを素晴らしい傭兵だと言います。その若さでみんなからそう言われるあなたの弟子になりたいんです」

「ちょっと待て」

一生懸命、話しかける少年にベリルは眉間にしわを寄せた。

「はい」

「その若さ……？　どういう事だ」

「え？」

「聞いてないのか」

「な、何がですか？」

「私は見た目通りの年ではない」

「えっ童顔なんですか？」

そう来たか。

「50は超えている」

「は……？」

「私が15だったのは30年前の話だ。25で年を取らなくなった」

「へ……？」

ダグラスは意味が解らず呆然とした。

「解ったら帰れ」

「！？　まっ、待って……！」

足早に去るベリルの後ろ姿を追いかけた。

「解りません！　それに、それが帰る理由にもなりません」

一步も引かない少年にベリルはあからさまに嫌な顔をした。

「私は教えるのがヘタなのだ」

「それはウソでしょ。ライカさんがあなたは教え方が上手って」

「……」

あのやろう……帰ったら絞め殺す。ベリルは目を据わらせた。

「ベリル！」

声がかかって振り返る。

「キャシーか」

「また会ったわね」

「……っ」

大柄な美女に少年は後ずさりした。

「誰？ この子」

ベリルの隣に立っている子どもを見下ろす。見事なブロンドにくびれた腰の魅力的なボディはサンドカラーのミリタリー服に包まれている。

「ハミルの子だ」

「へええ、彼の。預かったの？」

「まさか！」

「でしょうねえ」

「いいえ！ 僕は彼の弟子になりました」

笑って言った女性に少年は鼻息荒く胸を張った。

「……」

眉をひそめるベリルにキャシーは小さく溜息を吐き苦笑いで返す。

「諦めなさいな。ああいう子はきかないわよ」

ベリルは再び頭を抱える。

「まあ頑張っただけ」

言ってベリルにキスし去っていった。

「誰ですか？」

「キャシー・キング。ハンターだよ」

「！ ハンター……あれが」

少年はハンターに会うのは初めてだった。依頼を受けて対象を捕える者の事をハンターと呼ぶ。

「あれっ？」

気が付くとベリルがいない。驚いて辺りを見回した。

「あっ！？ 待ってください！」

車に乗り込もうとしていたベリルを急いで追いかけた。

## \*予期せぬ訪問者

「どこに行くんですか？」

「モーター」

それに少年は怪訝な表情を浮かべる。

「依頼の詳細をまだ聞いていない。今日はひとまず概要を聞き引き受けるかどうかを決めたただけだ」

「依頼！？」

少年が嬉しそうに目を輝かせた。

「お前を弟子にした訳じゃない。連れていかんぞ」

「ダグラス」

「ん？」

少年はベリルをしつかりと見据える。

“お前” じゃない。ダグラス」

ベリルは「知った事か」と小さく舌打ちした。

刹那――

「うっ！？」

後ろから猛スピードでせまってきた車がベリルのピックアップトラックの前で突然止まった。

「……」

何事かとベリルは眉間にしわを寄せる。

「！」

そして出てきた人物に目を据わらせた。

「ようベリル」

「泉か。危ない事はするな」

ベリルはドアを開かずガラスをスライドさせた。

「……？」

少年は気安くベリルに話しかける男の声に興味を示し身を起こす。赤茶色の髪と瞳。見たところ東洋人ぽい。

でも……なんだか2人の間に緊張感が漂っているようにも感じられた。

「開けてくれないかな」

「イヤだ」

「もう服の中に手、入れないからさ」

「!？」

手……!？　ダグラスはギョツとした。

「久しぶりに会えたんだから再会を喜び合おうよ」

男はニコニコとベリルに話しかける。

「喜び合えると思うか」

しかし彼の目は厳しかった。

「じゃあ俺だけでもいいや」

そう言って開かれた窓に手をかけて顔をベリルに近づける。

「……」

ベリルが眉をひそめて顔を遠ざけると、ドアの開閉スイッチに素早く手をかけた。

「!？　しまっ……」

泉という男はドアの鍵を開けすかさずベリルの上に乗る。あまりのあざやかな行動にベリルも少年も啞然とした。

「やあ」

「出ろ」

嫌悪感を全面に引き出したベリルの顔を満面の笑みで泉は見つめる。

しばらくの沈黙が車内を満たしたが、彼らの間ではすさまじい闘いが繰り広げられていた。

「……」

そんなピリピリした雰囲気、少年は感じ取る。

一体この人は……？

「そういえばこの子は？」

「!　やめ……っ」

問いかけにピクリと反応したベリルの隙を逃さず抱きしめた。

そして――

「!？」

うそ……

少年は初めて男同士のキスを目撃する。

割と長い時間、数十秒ほどダグラスはそれを眺めた。

「やめんか！」

泉の唇から解放されたベリルは息を吐き出し乱暴に口を拭った。

「相変わらず気持ちいい唇してるね」

ベリルの言葉を完全に無視して男はやりたい放題だ。

「誰の子？」

「ハミルの子だ」

「！」

見つめられて少年はギクリとする。

「生憎25以上が俺の対象だ」

ガキには興味無い。とニヤリと笑う。

「私は40超えてるが」

「見た目は25だろ」

印象的な輝きを放つエメラルドの瞳とその整った顔立ちを目を細めて見つめる。

「弟子をとるのか？」

「そんな気は無い」

会話をかわしながらも抱きつかれまいとするベリルと抱きつこうとする泉が静かに闘っていた。

## \*攻防戦

「いい加減にせんか！」

声を張り上げたベリルにすかさず2度目のキス。

今度はかなり深いらしい……抵抗するベリルの腕の力がゆるゆると抜けていくのが見て取れた。

「……」

わゝこの人って凄くキス上手いなあゝ……などと少年はじつくり観察した。

「やめんか！」

解放されて荒い息を整えながらギロリと睨みつけ再び口を拭う。

「泊ってるとこ教えて」

「ふざけるな」

思い切り睨み付けられているのに泉はにっこりとした。

「……」

なんて図太い神経してるんだろう……少年は彼の性格に感歎する。しかしベリルが素早くハンドガンを抜いて泉の首に銃口を押し当てた。

「！」

これにはさすがの少年も驚く。

「服の中には手を入れないと言わなかったか？」

噛みしめるように言ったベリルに泉はニヤリとする。

「さっきはさっき、今は今」

しれっと答えた。いつの間にか泉の手がベリルの服の中に入れられている。

「これ以上は付き合えんぞ」

「解ったよ」

泉は薄く笑って少年に目を合わせる。

「年寄りのくせにカタいだろうこいつ」

「そういうレベルではないわ！」

「うおっ！」

ベリルは泉を蹴り出した。

「もっと優しくしてくれよ」

「知るか」

ベリルはすぐに車を発進させる。

「誰ですか？」

「泉 恭一郎。傭兵だ」

「え？」

「！ ああ……キョウイチロウ イズミ」

名前の部分を日本語で言ってしまった。ベリルはすぐに言い直す。

「あの人も傭兵なんですか？」

「腕はいいのだがね」

いかんせんあの性癖だ。集まった兵士の中に気に入った奴がいるとすぐに手を出す。

「ベリルさんもやられたんですか？」

「……」

「やられたんですね」

「変な事を聞くな！」



## ＊告げる秘密と告げられない正体

モーターに着いてカウンターの男を一瞥する。

「1人追加だ」

歩きながらカウンターにアメリカ紙幣を数枚置いた。  
雑にドアを開き部屋に入ると少年は怪訝な表情を浮かべる。

「もっといい部屋に泊ってるのかと思った」

「ここは馴染みのモーターだ。安いしサービスもいい」  
冗談交じりに発する。

「お前はベッドを使え」

「ベリルさんは？」

「私はその角で寝る」

ドアのすみを示した。

「僕、小さいから2人で寝られますよ」

「男と寝る趣味はない」

深夜——ようやく目当ての人物に出会えた事で少年は興奮気味だった。

なかなか寝付けなかったが、うつらうつらしてきた頃……突然、  
暗闇の中で誰かがのし掛かってきた。

「!？」

驚いて叫ぼうとしたが口を塞がれている。一体、何が起こっているんだ!？

「ん……？ あれ？」

のし掛かっている人影が怪訝な声でつぶやく。

「!」

灯りが点いたが少年はその明るさで目の前が暗くのし掛かっている人物をまだ確認出来なかった。

「何をしている」

ベリルが目を据わらせてベッドにいる人物に発した。

「あ、イズミさん……？」

「ありゃ。ガキか」

「私だと思ったのか」

少年に馬乗りになったまま泉は苦笑いする。

「お前のやりそうな事だ」

あきれ顔で腕を組み近寄るベリルを泉はすかさずその腕を掴みベツドに押し倒した。

「子供の前で披露する趣味があるのか」

「……強い盾を持ったな」

泉は仕方ないと諦めてベリルから離れる。

「またな」

「遠慮する」

にこやかにドアから出て行く泉を見送り溜息を吐き出した。そんな横顔を少年は見つめる。

「あの……」

昼間、聞き流していた事を思い出す。

「ベリルさん……は、どうして年を取らないの？」

ベリルはそれに、ああ……とつぶやいた。

「そういう力を持っている奴がいてね。私にそれを使ったんだよ」

「えっ！？　じゃあまだ何人かいるんですか？」

「いいや、使ったのは私にだけだ」

「どうして？」

ベリルはベッドに座り直し静かに語った。

「その力は一度きりのものでね。奴はそれを使う気はなかった。それでも使わなければならない状況に立たされて仕方なく私に使ったという訳だ」

「ふーん？」

「そういう人間の事をミッシング・ジェム呼ぶ」

人類の歴史に埋もれた存在。それは力を持つ者にも適用される言

葉だ。

「だが奴にはもうその力は無い」

追われる心配はなくなったのだ。そう言ったベリルの目に少年は優しさを見て取った。

自分が死ねない体になった事よりその人が追われなくて済む事に安心している。元々、数多くの人種から摂取されたヒトDNAをつなぎあわせて造られた『キメラ』であるベリルは、すでにミッシング・ジェムだといえた。彼がキメラである事を知る者は数人のみだ。知られれば彼を造ったA国——アルカヴァリユシア・ルセタから追われる事になる。傭兵という仕事に長生きは望めないという安堵感は、不死になり崩壊した。

誰にも告げる事のない秘密をベリルは永遠に背負い続けなければならなくなったのだ。

## \*仲間

朝、ベリルはダグラスをモーテルに置いていこうとしたが……

「査察？」

「ああ、定例のね」

犯罪行為は行われていないかと警察が行うパトロールだ。

「悪いが今日1日は来ない方がいい」

肩をすくめてカウンターの男が言った。

「今日だったか」

ベリルは小さく溜息を漏らし少年に視線を移す。

「どこに行くんですか？」

「依頼の詳細を聞きに行く」

本当は少年を連れて行く事はしたくない。紹介すれば大々的にベリルの弟子として公認されてしまう。

今までもベリルに教えを請おうとした人間は何人かいたが、彼はそれを拒否した。彼は己の存在を良しとはしていない。そんな自分が人に何かを教えるなど……

ライカは彼にとって予定外の人間なのだ。セシエルの拾い子でなければ放り出したい。

郊外——少し大きめの施設が視界に入ってくる。車を降りると心地よい緊張感が肌を刺激した。

「ハアイ、ベリル」

声をかけられて振り返るとキャシーが立っていた。

「あら、連れてきたの？」

「仕方なくな」

案内されて一室に入る。

「！」

そこには沢山の人間がいて、ひと癖もふた癖もありそんな風貌が並んでいた。皆ベリルに手を挙げて挨拶をかわす。それにベリルも手を挙げて応えた。

集まった処で全員が椅子に座ると依頼をしてきたであろう男が前に立ち発する。

「今回の依頼は実に変だ。この施設の破壊を頼みたい」  
大きなディスプレイに映し出された建物に口笛が鳴らされる。

「ここは知ってる。かなりデカイ組織の武器工場だ」

「ここは誰も手を出さなかったぞ」

「おいおい、マジかよ」

「見れば相当な規模だと解る。以前から私も目を付けていた施設だが、さすがにデカすぎて二の足を踏んでいた場所だ」

みんなが戦々恐々とする中、キョトンとする少年にベリルは説明した。

「そうだ。そうやって臆していた間に、ここまで大きく膨れあがった。今やらなければこれ以上、彼らの犠牲者を増やしていいのか？」

言われて全員何も言えなかった。

確かに、考えあぐねて奴らに時間を与えてしまったのは事実だ。

「それで今回、我々がその資金を全面的に援助しようとなった訳である」

臆した者は素直にキャンセルしてくれて構わない。そう言われれば受ける他はない。

誰も抜ける者がいないと確認した依頼者は今までよりも声高に口を開いた。

「この作戦のリーダーを彼に頼みたいと思う」  
示された人物は……

「ベリルか」

「彼ならいけるかも」

「奴が参加するのか」

口々に発せられる声にベリルは目を細める。そして前に出るよう

にうながされた。

「私が指名されたが。異論のある者は？」

ベリルは重い腰を上げて前に進み出て発する。

「いる訳ねーだろ」

「頼りにしてるぜ！」

聞いて小さくうなづく。

「何人だ」

「45人」

依頼主に視線を合わせ訊ねるとリストを手渡された。

「あと5人いいかね？」

「希望者でも？」

「腕のいい奴がいる」

「いいだろう。連れてきてくれ」

依頼主は応えたあと傭兵たちに付け加える。

「成功すれば報酬を渡す。完全成功制だ」

「うは、実費かよ」

「成功すればいいのさ」

「軽い軽い」

依頼主の言葉に明るい会話が交わされる。

「トマックとメイヤー、それにモリスは施設の監視に付き合ってくれ。一週間後、作戦を練るため再び全員ここに集合だ」

ベリルは一同に向き直り指示を下した。

「おう！」

「了解」

確認して一斉にテントから出て行く。

## ＊戦闘準備

「あの……」

「なんだ」

「どうしてキャシーさんが？」

「彼女はハンターなのに……」

「ああ、彼女は傭兵としての仕事も受けているのだよ」  
「そう言ったベリルの肩にポンと手が置かれる。振り返って眉間にしわを寄せた。」

「やっぱり同じ依頼受けてたな」

「泉が笑ってさらにベリルの体に触ろうと近づく。」

「いちいち触れるな」

「リストの中にあつた彼の名前をベリルは脳内で消去していたのだ。」

「弟子にする気になったのか？」

「だとしてもこの作戦に加える気は無い」

「当然だな」

「どうしてですか」

「2人の会話に少年はムツとする。」

「聞いてなかったのか？　かなり厄介なシロモノなんだよ」

「父さんはどの作戦にも必ず参加しろって言いました」

「子供を谷に突き落とす獅子よりもそりゃ厳しい言葉だな」

「泉はベリルに視線を移すと彼は同意するように肩をすくめた。」

「そう言うんだ、参加させればいい」

「……」

「泉の言葉にベリルは眉をひそめる。」

「死んでもお前に責任を負わせない。そういう意味だろ」

「責任より死なせる事の方が問題だ」

「確かに。だったら死なせなきゃいい」

「お前なら大丈夫さ。泉は言ってベリルの頬にキスをして去ってい

く。

「言ってくれる」

ベリルは呆れたように溜息を漏らした。そして少年に目を移す。

「死んでも恨んでくれるなよ」

「死んでみないと解りません」

ダグラスはニヤリと笑って言った。

それからベリルと少年はトマック、マイヤー、モリスと共に巨大武器工場の近くまで訪れる。

「この規模だと軽く見積もっても200人はいると思うが、どうだ」  
入手した見取り図と照らし合わせながら話し合った。

「おおよ私の予想と合っている」

トマックの言葉にベリルは同意するように発する。

「200対50かよ……とんでもねえな」

溜息混じりにマイヤーがつぶやいた。

「この一週間で作戦を練ってみよう。仲間の犠牲がゼロという訳にはいきそうもないが……」

「頼むぜ。俺たちは引き続き監視を続ける」

「逐一、報告してくれ」

ベリルとダグラスは3人と別れて車に乗り込んだ。



## \*馴染むもの

「……」

何かを考えながらベリルは車を走らせる。

助手席にいるダグラスの事など眼中に無いようだった。

「……っ」

入り込めないような雰囲気、ベリルに喉を詰まらせる。

今度の作戦の事を考えているんだろうか……彼らの会話から察するに、かなり厳しい仕事らしいし。そんな事を思っ、少年は息を呑んだ。

「！」

車はおもむろにレストランの駐車場に入っていく。

「？」

「腹が減ったろう」

「あ……」

ちゃんと考えてくれてたんだ。

少年はピザを注文したがベリルを見ると注文したのは軽いサラダだけだった。

「？」

小食……？ そんな訳ないよね。考え事でお腹が空いてないだけかな？ そう思っ、パクパクと食べ始めた。

「美味いか」

「うん」

美味しそうに食べる少年を、コーヒを傾けながら見つめる。

「銃の扱いは？」

「大丈夫。父さんから習った」

「そうか」

ベリルは自分の銃を手渡した。ピザを持った手で受け取ろうとし

たダグラスに手を拭けとハンドガンを下げた。

手際よくハンドガンを持つ少年に納得したようにハンドガンを奪い取る。

「それ、よく手入れされてるね。凄く持ちやすい」

残りのピザを口にほおぼりながら少年は言った。

「常に持ち歩いているモノだからな」

「もっぺん貸し……っ」

手を出そうとした少年に鋭い刃を突きつける。背筋が凍るほど驚いたがそのナイフをくるりと回し少年に柄を向けた。

「ナイフの扱いも？」

「も、もちろんだよ」

手に持つ姿も違和感が無い。ベリルは確認し終わるとナイフを返せと指で示した。

「持っただけで解るの？」

「大体だな」

警察の査察が訪れるためいつものモーテルには向かえない。ベリルはもう1つの馴染みのホテルに向かう事にした。

駐車場に車を駐めて後部座席に置いてある荷物を手に取ってホテルに入る。

そしてチェックインを済ませ部屋に入ると、セミダブルの部屋は前日に泊ったモーテルよりも格段に綺麗だった。

「わお！」

少年は嬉しそうにベッドに体を投げてスプリングを弾ませる。ベリルはそれを一瞥しバッグの中身をベッドに並べていった。

「わっ！？ 凄い……」

沢山のハンドガンとナイフ類がバラバラと出てきてダグラスは目を見張った。

「持ってみろ」

言われて少年は恐る恐る手に取る。

「しつくり来るモノを出せ」

「……」

時間をかけて吟味している少年の姿を見つめる。

「これと、これかな」

「確かだな？」

ダグラスは小さくうなづく。それ以外をバッグに仕舞うとその2つを手に取り工具を出して手入れを始めた。

「手を出せ」

ベリルは出された手を握る。

「強く握ってみろ」

「？ うん」

確認してまた手入れをし興味津々で眺めていた少年に、手入れを終えたハンドガンを投げ渡した。

「！」

さっきよりも手に収まるハンドガンに少し驚きながら見回す。

ベリルは次にナイフを鞘から出すと刃を確認し始めた。小型のシヤープナーで磨いたり柄の部分を叩いたりと繰り返し戻したあとに納得してナイフを鞘に仕舞いまた少年に投げ渡す。

「それはお前のモノだ、大事に扱え」

腰から銃を引き抜き今度は自分のハンドガンを手入れしながら発する。

「！ 僕の……？」

## \*留守番

朝——どこかに出かけようとしたベリルの後ろからついてくる少年を制止する。

「お前はここにいろ」

「どうして？」

「今から行く場所にお前は連れていけない」

「なんでだよ」

少年は頬を膨らませて抗議した。

「私のためではない。お前のために言っているのだ」

「どこに行くのかだけ教えてよ」

「私の住処」

「なんでそれが僕のためなのさ」

「捕まった時、私の住処を聞かれたらどう答える」

これから行く場所はあまり多くの人間に知られる事は避けたい場所なのだよ。

「えっ……!？」

「これでも敵は多い方だね。知っていて知らないフリをするのと本当に知らないのでは雲泥の差がある」

お前に心を隠す術があるのなら連れていってやらんでもないがね。薄笑いを浮かべてベリルは言い放った。

「……ベリルのケチ」

ホテルでじっと待っている少年は少し苛立っていた。住処に連れていってくれないという事は、まだ弟子だと認めていないという事だ。

彼に出会ってうちに訪ねてくる人たちが彼をひとしきり褒めていた事に多少の疑問を正直、抱いていた。

しかし、顔合わせの席で彼がリーダーに選ばれたとき羨望の眼差

しで彼を見つめるいくつもの目にウソではなかったのだと再認識した。

少年の父親は傭兵家業を引退して5年になる。

それまでの財と顔の広さで現在も裏の世界では名の知れた人物だ。傭兵時代の話を聞き少年は父の偉大さに誇りすら覚えた。

いつか父のような偉大な傭兵になる……それが少年の夢である。そのため的一步がベリルの弟子になる事だ。

『素晴らしき傭兵』

そう呼ばれる彼にどれほど憧れただろう。

なのに……こんな処で待ちぼうけなんて！ 少年はふてくされてベッドに寝そべった。

## \*戦闘態勢

「ダグ、起きろ」

「ん……っ」

頭を優しくなでられる。

「あ、おかえり」

目をこすって起き上がるとバッグを投げ渡された。

「お前の荷物だ自分で持て」

中を見ると着替えやら装備やらが色々入っていた。

「！ ショルダーの方がいい」

入っていたホルスターに不満げに発する。

「好みだけで判断するな。己に合ったものを使え」

「ちえ……」

少し口をとがらせヒップホルスターを腰のベルトに装着し確認してバッグに仕舞った。

「あ、バックサイドホルスターだ。いいな、格好いい」

口笛を鳴らして羨ましがる少年を一瞥し装備を整える。

「見た目や偏見だけで決めるのは危険だ。己の使いよい形を知れ」

「解ってるけどさ」

そのあとベッドの上にA2サイズの紙が広げられた。例の武器工場の見取り図だ。いくつか赤い丸が記されている。

ベリルは青いマジックと赤いマジックを持ち、あちこちにやじるしを書きだした。

「……」

立たせた片膝に右腕を置いて考え込む。そしておもむろに立ち上がり別のバッグを開け始めた。

「ダグ、手伝ってくれ」

「いいよ、何？」

出てきたのは大量の小型ヘッドセット。

「命綱だ、入念にチェックする」

「凄い数……人数分か」

チェックし終えたヘッドセットをバッグに仕舞う姿を眺めながら問いかけた。

「ベリルさんのお父さんって、どんな人なんですか？」

「！」

その言葉に手が止まる。

「覚えていない。いや、そうでもないか」

「どっちなんですか……」

「傭兵では無かったが名うての兵士だった」

「へええ」

ベリルはかつて戦術を教わったブルー教官を思い浮かべる。

国から招かれ、「キメラ」であるベリルの戦術の教官となった。

ベリルにとつての『父』はきつと彼であつただろう。

自分のために命を賭けた人々……それは今でも彼の心の中に静かに重たい苦痛を与える。

一週間後——再び集まる仲間たち。今度は前回よりも広めの部屋だ。中心の大きなテーブルに見取り図を広げ、それを取り囲むようにして集合する。

ベリルは1人ずつに作戦などを記した紙を手渡して発した。

「1チーム5人ずつで行動。A～Jまでの班に分ける。Aは指揮。

CとDは爆破、FとGは退路の確保だ。IとJは攪乱<sup>かくらん</sup>。残りは右チームの護衛。これから指示する動きに徹してくれ」

言ってヘッドセットを配る。

少年にも紙が渡されるが自分の名前が無い事に不満だった。もちろん指揮をとるA班に入れられるのは解っている。

Aにはキャシーと泉が入っていた。とかく泉を嫌っているベリルだが、その腕には信頼を寄せているという事がよく解る。

一通りの説明を終え一端、休憩に入った。

## \*犠牲

「ダグ」

「！」

呼ばれて振り返ると泉が何かを手渡した。

「これ何？」

「レモン。ベリルに頼まれていた」

手榴弾を……？

「これは4秒後に爆発するタイプだ。ベリルが指示したら投げろ」  
一通り説明するとどこかへ言ってしまった。

「？」

少年はマジマジとレモンと呼ばれる小さめの手榴弾を見つめる。

「受け取ったか」

そこにベリルが戻ってきた。

「これは？」

「泉は爆発物に長けている。何かあった時それを使え」

じゃあこれイズミさんのお手製？　ダグラスは手榴弾を見下ろし  
ベリルを見上げる。それは少年はただの「お荷物」ではないという  
事を表していた。

何かの局面で活躍する場があるかもしれない……少年は嬉しくて  
笑顔になる。

「命令違反はするな」

「うん、解ってる」

笑って言った少年の背中をベリルは軽くポンと叩いた。

アタックポイントに向かう前に全員が集まる。

「時刻合わせ」

ベリルの言葉で全員が自分の時計を見つめた。

「3・2・1・セット」



一斉にボタンを押し時刻を合わせる。

「当然だが命令は無視するな。修正可能か判断するのは私だ。解ったら解散」

全員が散り散りになり準備を始めた。

それぞれのアタックポイントに向かうためチームごとに車は移動を始める。少年はヒップホルスターを装着しハンドガンを仕舞って防弾スーツを着こんだ。

ベリルのチームはイズミ、キャシー、セオドア、ナギンそしてダグラスの6人からなる。工場に突入するのは最後だ。アタックポイントで待機し決行の時間までしばらく待つ。

決行の時間は午後11時——秒針が12を差して各々、静かに行動に移った。

<見つかった！ 戦闘に入る>

C班から通信が入る。

「！ もう……？」

キャシーは驚いて声を上げた。いくらなんでも早すぎる。

「H、I、Jはそのまま続行。BはC、Dを守りつつ広く展開」

ベリルは冷静に指示を下した。

「……っ」

ヘッドセットから響く音にダグラスは身震いした。

「Gの指示変更。Bの援護」

「！」

ベリルの声に少年はハツとする。冷静な彼の声は味方を安心させる。

常に冷静に味方を不安にさせないように……それが指揮官には大切だ。

ベリルは無言で手と目で仲間たちに侵入の合図を出す。先頭はベ

リル。次に泉そしてキャシー、真ん中はダグラス。

「！」

しばらく進むと敵の気配が前方に感じられた。泉はベリルの隣に並び小さく発する。

「俺は右」

「左」

泉とベリルは出てきた敵に狙いを定め引鉄ひきがねを引く。銃弾はみごとに命中した。倒れ込む敵から武器を奪いさらに進む。

すでにヘッドセット以外から銃撃戦の音が響いていた。

「……」

この状況は……やばいか？ という表情を仲間たちが浮かべている。ベリルは1人、怪訝な表情で目だけで様子を窺い発した。

「どうも妙だな」

「何がだ？」

「感知されるのが早すぎる。それに相手の統率が良すぎる」  
問いかける泉に応えると彼は眉をひそめて口を開いた。

「誰かがリークしたか、情報が漏れていたか……か？」

しかし、ここまで侵入してしまつては続行する他は無い。否、続行さざるを得ない状況になるように設定されたような感覚だ。

「ここで待っている」

ベリルはそう言つて小さく溜息を吐き出し飛び出した。

「えっ!？」

敵の中に突進したベリルに少年は驚いて目を丸くし思わず声を上げる。

「自分の特性を活かしているだけだ」

泉は薄笑いで言い放つ。

「……」

ダグラスはそれを理解したものの、敵の攻撃が当る度にベリルの顔が痛みに歪むのを呆然と見つめた。

死ななくても痛いんだ……なのはどうしてこんな事!？

「私たちのためよ。でなきゃ、あんなことしないわ」

キャシーの声は少し悔しげだった。そうさせなければならぬ状況に仲間たちも辛いのだ。誰かを犠牲にしなくては勝てない……だからベリルは自分を犠牲にした。

「状況が悪化すれば敵はそちらに攻撃を強化する。ベリルはこっちに敵を引き寄せてるのさ」

「でっ、でもそれじゃ……っ」

「私たちが危険だね」

キャシーは苦笑いで応える。

「全滅するより出来るだけ犠牲を減らす事が重要なんだよ」  
相変わらず泉は薄笑いだ。

まるでベリルが初めからこうする事を知っていたように笑っている。

「もちろん死ぬつもりなんてさらさら無いがな」

泉は言ってベリルの元に駆け寄った。

「わっ！？　ちょっ……」

止めようとしたダグラスをキャシーが制止する。

「大丈夫よ、ちゃんと勝算があって飛び出したんだから」

「Hello！」

明るく発して口の端を吊り上げ泉はベリルの背中に回ると、彼の背後を援護するように引鉄ひきがねを引く。

「人を盾にしておって」

「最強の盾だね」

2人は笑いながら敵を倒していった。

しばらくすると銃声が止みキャシーたちが2人に近づく。

「おみごと」

「先に進むぞ」

警戒しながら進んで行くと銃撃は先ほどよりまばらになった。こちらに引きつける作戦は成功だったようだ。

「C、D。状況は」

<設置完了した>

「素早く撤収準備。F、退路の確保は？」

<確保は出来てる>

「各班、被害状況を報告」

<Hだ。マイクがやられた>

「！　そうか……準備の出来た班から撤収」

## \*遂行の先

一通り撤収し終えたと感じたベリルが発する。

「我々も撤収だ。ダグ、レモンを」

言われて少年は手榴弾を取り出す。

「抜いて向こうに投げろ」

「うん」

指示通りにピンを抜き思い切り放り投げた。

瞬間——一斉に走り去る。数秒ほどして後ろから爆発音が聞こえたが構わずに走り続けた。

「撤収完了だ。ランデブーポイントへ」

工場から出てジープに乗り込み仲間たちが集まっている場所へ：  
そこは工場がよく見える高台だった。最後に来たベリルに仲間の1人が何かのスイッチを手渡す。

「……」

それを受け取り工場を見つめた。

おもむろにそのスイッチを押すと数秒後に轟音を響かせて工場が爆発していく。暗い空の下、工場は一際明るく派手に音を立てて崩壊していった。

「さあゝて帰るか」

「報酬いただきだな」

「待ってくれないか」

そんな彼らをベリルが制止する。

「どうした？」

「本当の依頼主から報酬を受け取らないかね」

「……」

そこにいる全員が顔を見合わせた。

彼らは依頼してきた人物が本当の依頼主では無い事は知っていた。代理が来るのはよくある事だからだ。

しかし今回に限ってベリルは本来の依頼主に会おうと持ちかけた。彼がそう言うのだ、きっと何か考えがあるに違いない……全員は小さくうなずいた。

## \*その怒りと真実

朝——アメリカの郊外にある邸宅の一室で男は電話を受けていた。  
＜作戦、成功だそうです＞

「！　そうか……報酬を払ってやれ」

男は電話から聞こえた結果に少しうなだれた。

「直接、取りに来たぜ」

「！？」

ドアの方から聞こえた声に驚く。

「久しぶりだなあ」

笑って言った泉の横にベリルが無表情に男を見つめてその後ろには今回の作戦で集められた仲間が立っていた。

「父さん……」

ベリルの後ろから入ってくる少年は眉をひそめてつぶやくように発する。

「ダグ……」

かつては作戦会議のために設けられていた部屋はとても広く、中心にはその名残りのテーブルがどっかりと構えていた。

上座に置かれている豪華な椅子にその男——ハミル・リンデンロープは腰掛けている。テーブルを挟んだ向かいにベリルたちは男と対峙するように集まった。

「10年振りか……」

ハミルはベリルを見つめてつぶやく。そんな男に静かな声で、だがしかし重い口調で発する。

「何故こんな事をした」

「何のことだ」

その言葉に鋭い視線を向ける。

「初めから我々を全滅させるつもりだったのだろう」  
「！？」

父さんが！？ ベリルの言葉にダグラスだけでなく全員が驚きの表情を浮かべハミルを見やった。

「何故そうだと思う」

小さく薄笑いを浮かべて聞き返すハミルにベリルはゆっくりと語り出す。

「情報が事前に漏れていたとしか思えん。本来の依頼主にその事を質そうと問い詰めたらお前の名が出てきた」

何故だ……？ ベリルは厳しい目でハミルを睨み付け、さらに表情を陰しくさせて問いかける。

「何故、自分の子を殺そうとした」

「えっ！？」

僕を殺そうとした……？ ウソだね……ダグラスは発せられた言葉に呆然とした。

「……」

男は驚く少年を一瞥し吐き捨てるように言葉を紡いだ。

「そんな奴は俺の子じゃない」

「！？　なんで……っ？」

倒れそうな少年の肩にベリルは手を添えた。そんな少年に目も向けずハミルはさらに発する。

「お前もアイシャにせまられた1人だろ？　この中の何人、俺の妻と寝た」

「！」

それに仲間たちはざわつく。

「アイシャは強い男が好きだった。ここに来る奴を手当たり次第に誘惑し抱かれて喜んでいた」

今回、依頼された人間のほとんどはその可能性のある者たち。キヤシーと泉が加えられたのはハミルの計画を悟られないための隠れミノにするためだ。

「私は断ったぞ」

ハミルにとっては今更どうでもいい事だろうがベリルは一応の誤



解を解くため応えた。そんなベリルをハミルは激しく睨み付けると低く、くぐもった声で口を開く。

「そうやって貴様は永遠にこの世界で君臨し続けるつもりか」

「何の話だ」

「いい気分か？ みんなに慕われるというのは」

狂気にも似た目がベリルを見据える。

「死なない奴がトップに居座っていたんじゃ誰も上を目指さない。

貴様は邪魔なんだよ」

「なるほどね。よく解った」

泉が薄笑いで応え肩をすくめてさらに付け加える。

「奥さんと寝た奴らを殺すのとベリルの名声を失墜させるのが目的か」

全滅したとしてもベリルだけは死なない。

作戦は失敗、生き残り無し。そうなれば確実にベリルの信用は落ちるだろう。薄々それに感づいていたベリルだが、それが確信に変わると冷たい視線をハミルに投げた。

「そんな事のために貴様は彼らの命を消すつもりだったのか」

彼が本当の依頼主に会おうとした理由は仲間の命が危険にさらされたからだ。全滅を計画された事に怒りを憶えた。

ベリルの鋭い眼差しなど流すようにハミルはダグラスを睨み付け声を震わせる。

「俺の息子だと思っていたのに……」

自分の子ではないと気付いたのは5年前——誰の子かは解らないが彼は愕然とし妻を憎んだ。彼女がしている事に目を伏せ自由にしてやっていたのに……ここまで裏切られて彼は行き場のない怒りに震えた。

「愛していたのに！ こんな裏切りは許せない」

頭を抱え深い溜息を吐き出す。しばらく哀しみに目を閉じていたハミルだったが、ベリルを見据えて低く発する。

「お前ならここに来るだろうと思っていた」

「！ 退け！」

口の端を吊り上げたハミルに何かを感じベリルは自分から離れるように声と手で示す。

一斉にベリルから離れた傭兵たちの耳に重たい鉄のチェーンが移動するような音が上から響いた。

「！？ ベリル！」

大きな音を立てて降りてきた鳥かごのような形状をした金属の囲いがベリルを捕らえる。

「！」

自分の周りを確認し誰もいないと思っていたベリルの目に飛び込んできたのはダグラスの姿。

「何故逃げなかった」

驚いて少年の肩を掴んだ。

「だって……」

目線を落としたダグラスは震えた声でか細くつぶやく。

「僕は、いない子なんだろ」

「！ ダグ……」

少年の目に生きる気力は無い。

「……っ」

そんな少年をベリルは強く抱きしめた。

「それを決めるのは誰でも無い。自分自身なのだ。誰にも決められない。お前が自ら決めていかねばならない事なのだ」

強く応え目を吊りあげる。

「泉！」

「おうよ！」

泉はウエストポーチから小さな発火装置を取り出し囲いに取り付けた。

「そんなモノで破壊出来るものか」

ハミルは鼻で笑う。

確かに破壊は出来なかったが、囲いの1つはボロボロになった。

ベリルはそれを強く蹴り大きく曲げると隙間からダグラスを押し出す。それを泉が引きずり出した。

「死ななくても苦しむだろ」

小さく舌打ちしたあとハミルは手に持っていたスイッチを押した。「がああああっ！」

激しい電流が流れる音とスパークに手で目を隠しながら仲間たちはベリルの叫びに眉をひそめる。

「ベリル！」

「放電ゲージ!？」

人道的に問題があるとして使用禁止になった装置だ。こんなものを準備していたハミルに一同は怒りを露わにした。

「……」

泉はスパークの音を聞きながらゆっくり腕を下げハミルを見つめた。

「ダグ……すまないな」

「え……？」

「恨みはあとで聞く」

泉はそう言ってハンドガンを抜いたと同時に他の仲間も一斉にハミルに銃口を向ける。

「ハアーツハツハツハツ！」

ハミルの笑い声が響く中——多くの銃声が彼の胸を貫いた。

「! 父さん……っ」

ダグラスはその光景に体がガクガクと震えた。

キャシーはすかさずハミルが持っていたスイッチを奪うようにして掴みoffにする。放電が止まって上昇していくゲージを確認し彼女はベリルに素早く駆け寄り持っていた布を被せた。

「彼の醜い姿なんて見たくないでしょ。回復するまでこのままですさせて」

笑ったあと立ち上がり周りを見回す。

「彼が回復するまで中を搜索しましょう」

「おい！ みんな、こっちだ」

呼ばれて向かってみると、そこは寝室のようだった。

「！ 母さんっ」

すがりつこうとする少年を泉は引き留めた。

「背中をひと突きね。即死だったでしょう」

別の仲間がナイトテーブルの引き出しを開ける。

「おい、これ……」

「！ ハミルのカルテ？」

「ガン……末期だ」

「……」

ベリルにかけられた布が揺れる。

「ふう……さすがに利いたな」

むくりと起き上がり頭を何度か振った。真っ黒に焼けた皮膚や髪がベリルが動く度にボロボロと落ちる。

布を体に巻いてキャシーたちの処に足に向けた。

「！ もう大丈夫なの？」

「まだあちこち引きつるが、なんとか」

「……ベリルさん」

少年は声を震わせてベリルにしがみついた。

「……」

ベリルは黙って少年の肩をやさしくさする。

「ガンか……」

仲間から手渡されたカルテに苦い表情を浮かべた。

それは死ぬ事の無いベリルを憎むように静かに語りかけている。

「だからって健康な人間を憎むのはお門違いってものさ」

泉は肩をすくめてみせた。

「かつては英雄とまで言われたのに」

ぼそりと1人の男がつぶやく……

彼は全てを憎んで死んでいった。妻への愛とその妻の裏切り、そして死の恐怖……そんなものが英雄を悪魔に変えたのだ。

## \*流浪の天使

ハミル邸をあとにする一同。

「荷物はそれだけでいいのか」

「うん」

少年は小さなスポーツバッグをキュツと握りしめ弱しくうなずく。  
今までの家族の画像の入ったメモリーカードとハミルの形見、そして少しの着替えが少年の全てになった。

「……」

ベリルは彼の肩に手を添える。

「は〜……タダ働きかぁ」

「むしろ赤字だよ」

気分を変えるように男たちが口々に発した。

「今回は私が支払おう」

「ホントか？」

「そりゃ、ありがたい」

「助かったぜ」

ベリルの言葉に仲間たちはパツと明るい表情を浮かべた。

「ただし、1人1万アメリカドルだ」

「赤字よりマシさ」

「そうそう、タダ働きよりはいい」

「後で各自の口座に振り込んでおく」

「よろしく頼むぜ！」

それぞれ車に乗り込みベリルに別れを告げて去っていく。

「ハッ!? 待て、こいつは……」

「あなたに任せるわ」

「お前に懐いてるしな」

「キャシー! 泉! おいっ」

求める手の向こうには何も無し。

「……」

少年と2人ぽつんと取り残されたベリル。

力なくうつむく少年に小さく溜息を漏らし軽くポンと背中を叩く。

「行くぞ」

「え……」

オレンジレッドのピックアップトラックに手をかけて呆けたような顔の少年に、クイと乗るようにアゴで示す。

「私の住処だ」

「！」

少年は笑顔で助手席に乗り込んだ。

「……」

広い大地に点在する建物が視界をかすめていく。遠くを見つめる少年の目には涙が潤んでいた。

本当の父さんじゃなかったけど、愛されていた事は忘れないよ……開けた窓から吹き込む風に目を閉じる。

その時、確かにハミルは「父」だったのだから――

本当の父さんが誰なのか解らないけど、僕は新しい父さんの処に来たんだ。とても強くて、優しく、絶対に死なない父さんの処に……

「……」

ベリルは外を眺める少年に目を細める。

この雰囲気――これはセシエルのものだ。

『流浪の天使』と名付けられた、かの有名なハンターであり傭兵であった「クリア・セシエル」。

いつか、本当の事を話す時が来るだろう。

その時私が出会った彼の事、全てを語ってやろう。優しさを湛えた潤んだ瞳は、まさしく「天使」と呼ぶにふさわしかったと。

少年はベリルに立派な傭兵として育てられ誰もが憧れる者となる

事だろう。

3人の名高い傭兵を父に持つ聡明で冷静な傭兵——その名は「ダグラス・リンデンローブ・セシエル」



## \*エピソード

“ジリリリリリリ……!”

朝——目覚ましがけたたましく鳴り響く。

ここはオーストラリア連邦ノーザンテリトリー準州の首府ダーウィン。ベリルの自宅だ。

「んゝもうちょつと……」

「ダグラス!」

「うわっはい!」

「早く起きろ」

階下から2階に声を張り上げて小さく溜息を漏らした。

「なんで俺はつれてってくれないんだよ!」

ダイニングでライカが声を張り上げる。

ブラウンの髪は肩まであり青い瞳に彫りの深い顔立ち。ベリルのもう1人の弟子だがベリル自身はそれを認めていない。

ライカはダグラスを連れて帰ってきたベリルに、ばつの悪そうな顔をした。

それも当然だろう。留守番に腹を立ててあんな手紙をよこしたのだから……朝食の準備をしているベリルにブー垂れるライカをダグラスは呆れて見つめる。

「……」

あんな厳<sup>いか</sup>つい顔してるのに子どもみたい。もう27歳なのに……と小さく溜息を吐いて顔を荒いに洗面所に向かう。

「お前は別の仕事が入っているだろう」

「あんたが入れたんだろうが!」

「ハンターとして一人前になりたいのだろう?」

「うっ……」

仕返しただけのくせに! とも言えずテーブルに腰掛けて食パ

ンにかぶりついた。

「ふああ」

「早く食べる」

「眠い……」

顔を洗ってきたダグラスはまだ眠気にあくびが止まらない。なかなか起きないダグラスのおかげで出発が少し遅れ気味なのだ。

ひとまず準備と確認を済ませピックアップトラックに乗り込むベリルとダグラス。

空港に走らせている間もダグラスはあくびと眠気に戦っていた。

「いい加減、目覚ましが鳴る前に起きるか」

「だってえゝ眠いよ」

「その閉じた目をこじ開けてチェックしろ」  
車を走らせながらベリルは荷物を投げ渡す。

「ふあゝい……」

「……」

寝ぼけ眼のダグラスにベリルはピキッと目を据わらせた。

「ぎゃっ！」

「チェックしながら歩いて来い」

ベリルはダグラスを車から蹴り出すと言い捨てて走り去る。

「ちよっ！？ 待ってよ……！ ウソ……」

十数メートルほど追いかけたが、車は止まる事無く走っていった。

「……マジで？」

ダグラスは肩を落とし、まだ暗い舗装されていない道路をトボトボと歩き始めた。

1時間ほど歩いた処で対向車線からヘッドライトの灯り。

「！？」

助かった！ なんとか頼んで乗せてもらおう。

「おい！ 止まってく……れ……」

見覚えのある車体……止まった車の窓が開く。

「チェックし終えたか」

薄笑いでベリルが問いかけた。

「ベリル！」

少年は急いで車に乗り込んだ。

仕事をしている時、ベリルは凄く厳しい。

命がかかっているから厳しくなるのは当然だ。でも、それ以外はとても優しくかった。柔らかい笑顔で沢山の事を教えてくれる。

女性にモテるのがよく解る。

まあ……イズミのような人たちにも人気あるのも解るよ。彼のような強烈なアプローチをしてくる人は稀だけどね。

僕は彼から色々と学び、その技術を盗んで立派な傭兵になりたい。  
3人の父の名を汚さぬような、そんな傭兵にきつと……

## \*プロローグ

そんなこんなでセシエルの忘れ形見である2人を弟子として引き取るハメになったベリル。

溜息交じりにライカとダグラスを見つめる彼だが、セシエルの面影が2人から垣間見えて目を細めた。

絆は途切れることなく受け継がれ、それは大きく広がっていくのかもしれない。輝く笑顔は今でもベリルの脳裏に鮮明な映像として残っている。

強く何かを感じた相手だが……まさかこんな事にまでなろうとは考えも及ばなかった自分に溜息を吐き出す。

「お前に何の仕返しも出来ないのはさすがに悔しいものだ」  
空を仰いでつぶやいた。

## \*バカンス

「ベリル！」

「ん？」

振り返ると少年に勢いよく抱きつかれて青年は少し咳き込んだ。

「はしゃぐな……」

愛らしい笑顔がベリルを見上げる。少年の名はダグラス・リンデンロープ。

「お前が見ている」

「知らねーよ」

「ライカよりベリルの方がいい」

もう1人の男はライカ・パーシエル27歳。ブラウンの髪と青い瞳。印象的な彫りの深い顔立ちをしている。

10歳の時にセシエルに拾われて、彼が死ぬまで側にいた人物だ。3人は骨休めにオーストラリアの砂浜に来ている。

「どうして水着にならないの？」

砂浜でかつちり服を着こんでいるベリルに怪訝な顔をする観光客。ダグラスはそんな彼に問いかけた。

「泳ぐ気が無いから」

「もしかしてカナヅチなんじゃね？」

楽しそうにライカは口の端をつり上げる。

「ベリルは泳ぎ得意だよ。時々プールに行って泳いでたもん」

もちろんトレーニングのためである。神秘的な明緑色の瞳をサングラスで隠しベリルはサンラウンジャーでくつろぐ。

2人の保護者のようなこの人物はベリル・レジデント、？歳。外見は25歳ほどで金髪のショートヘアにエメラルドの瞳。彼は特別な存在である。

『ミッシング・ジェム』と呼ばれる存在——それは人類の歴史に存在してはならない。記憶に値しない存在の事だ。彼はその1種、永

遠性を持つ不老不死のミッシング・ジェムなのである。

20年前にハンター、クリア・セシエルと出会い。盟友となった。その忘れ形見たちを彼は引き受ける形になってしまったのだ。

27歳だというのに今まで生きていたのが不思議なくらい要領の悪いライカと要領は良いが好奇心が多すぎるダグラス。

この2人の面倒を私が見るのか……ベリルは溜息を漏らさずにはいられない。

サングラスを外して上半身を起こすと、一斉に近くにいた女性たちの視線が注ぎ込まれた。

「……」

ベリルはそれに眉間にしわを寄せる。よく見ると7割は日本人だ。女性たちはこの3人に釘付けになっていた……その印象的な顔立ちと存在感。

この3人は一体どういう関係なんだろう？ 女性たちのそんな視線が突き刺さる。まさか25歳に見えるベリルが親代わりなどとはつゆほども考えていないだろう。

しかめっ面のベリルにダグラスがビールを持ってきた。

「何故ビール」

「暑い日にこういう炭酸ってスカツとするよね」

だったらコーラでもいいと思うのだが……大人ならアルコール飲料というイメージでもあるのだろうか？

「カーっ！ 美味しい」

「……」

まだ27歳だというのに……仁王立ちでビールを飲み干すライカにベリルは年寄り臭さを感じた。

ベリルは現在50歳である。25歳の時に不老不死になり25年が経っている。

「！」

缶ビールを傾けるベリルに1人の女が近寄ってきた。ナンパか？  
と思ったが……

「ベリル・レジデント。あなたに頼みたい事があります」  
「ほう？」

彼女の目に鋭い光を感じた。

## \*女性の依頼

「で、依頼というのは？」

3人はビーチから女性の家に移動した。差し出されたジュースにダグラスは嬉しそうにストローをくわえる。しかし……

「あっ……？」

ベリルはダグラスのグラスを奪い少し味わった。それに女性は小さく笑う。

「毒なんて入ってないわよ」

「毒!？」

ライカとダグラスはギョツとしてジュースを凝視した。

「そのようだ」

言ってグラスをダグラスに返した。

「助けて出して欲しい人がいるの」

女性は写真を手渡しながら自己紹介も兼ねて続ける。

「私はリアンナと言います。助け出して欲しいのは私の父。ロッシユ・バーゴン」

ベリルは写真の人物に眉をひそめた。

「ロッシユ……？」

「知ってるの？」

ダグの質問には答えずリアンナという女性に視線を移し問いかけた。

「何かあったのか？」

「実は……ある要人のご子息が誘拐されて、その救出を依頼されたのが父なの。でも相手は予想以上の武装集団で……」

「逆に捕まってしまった？」

「ええ、そう」

リアンナは頭を抱えて疲れた様子だ。

「どうしていいか解らなくて……あなたがここに来ていると父の仲



間から聞いて、あなたを探していたの」

「彼の仲間には頼まなかったのかね？」

「頼もうとしたわ……でも、みんな腰が引けちゃって」

「だろうな。ロッシュが失敗するほどの相手だ、簡単に首は振れない」

「お願い、あなただけが頼りなの」

リアンナはさすがのような目でベリルを見つめた。

「ねえ、ロッシュって誰なの？」

ダグラスは車に乗り込もうとするベリルに訪ねた。

「有名な傭兵だ。何度か一緒に仕事をした事がある」

ベリルは詳細なデータを後日、来るまでに集めておけとリアンナに言っただけをあとにした。車に乗り込んだベリルたちは、しばらく走らせて馴染みのホテルに入る。

部屋に入るとダグラスがベッドに体を投げた。それにベリルは見向きもせず携帯に手をかける。かけた相手は……

「泉か、頼まれてくれないか」

「！」

仲間を集める気なんだ……ダグラスはすぐに気付いた。

息を潜めてその様子に聞き入っているダグラスとは違い、ライカは鼻歌交じりで冷蔵庫からジュースを出してがぶ飲みしている。

「……」

なんて緊張感の無い奴……少年は何も言えずにその姿を見つめた。

「ライカ」

「うわはいっ」

電話を終えたベリルがおもむろに彼に発する。

「北はどっちだ」

「えっ！？ えと……あっち？」

答えたライカにナイフを投げつける。

「きゃあ！」

ライカは驚いて身を縮めた。

「方角を明日までに完全に把握しておけ。でなければ次の作戦には参加させん」

「ええええ！？ 明日っ？」

ライカは愕然とした。この12年、方角を掴めなかったものを突然、明日までに把握しろだなんて……きっと俺を連れて行く気なんて無いんだ！ ライカは卑屈になって別の部屋でいじけていた。

「いいの？ あれ」

「いつまでも人に頼っていては覚えるものも覚えん。奴は自分が周りに甘えている事に気付いていない」

それから数時間後——ベリルはライカの部屋のドアを開いた。暗い部屋の中、ライカはそのまま寝てしまったようだ。

「ライカ、起きろ」

「んあ？」

寝ぼけ眼で見上げる。目を据わらせてベリルが見つめていた。

「うわっと」

驚いて起き上がる。

「南はどっちだ」

「はえっ！？」

応えるのを待つベリルに彼は恐る恐る口を開く。

「あっち……？」

「外にいる時は常に太陽の位置を確認しろ。建物に入る前にも確認し、自分の位置と照合させて記憶するんだ」

「はい……」

ベリルはさらに続けた。

「いいか、ハンターはいつも単独で行動すると思うな。一歩間違えば仲間を殺してしまう事を理解しろ」

「……っ！？」

言われてセシエルの事を思い出し背筋が凍る。

「セシエルの事はお前のせいじゃない」

その様子に彼の考えを悟ったベリルが発した。

「でも俺は……っ」

詰まらせるライカにベリルは溜息交じりに応える。

「自分で克服するしかない。私は何もしてやれん」

そう言って部屋を出た。

「オヤジ……」

## \*目覚め

「リアンナ」

「！ ベリル。どうしたの？」

ベリルは再びリアンナの家に訪れた。しかしその瞳は厳しい。

「全てを話せ」

「……なんの事？」

「アンデルセンが絡んでいるならただの誘拐事件ではない。本当にロッシュを助けて欲しいなら真実を話せ」

でなければ私は手を引く……ベリルの言葉にリアンナは蒼白になる。

「父が救出を頼まれたのは……国宝なの」

「国宝？」

「それは“神の子供”と云われるもので、絶対に口外してはならないと」

「モノはルビーだな」

「ええ、そう……」

『ピジョン・ブラッド』と呼ばれる宝石がある。

しかしその宝石の色は神秘的でとても言い表せないときれ、  
“神の子”と名付けられた。

「……」

ベリルはそれに頭を抱える。

「何故そんなものに彼が？」

「強く頼まれて断れなかったの」

「ふむ……」

救出対象が人間とアイテムになった。

作戦を変更しなければ……深い溜息が漏れる。

一方——キャンプに向かう泉のジープ。

「……」

ライカは泉をじっと見つめた。

「俺の顔に何かついてるか？」

泉は薄笑いで問いかける。

「東洋人だよな」

「日本人だ」

「まだベリル狙ってるの？」

緊迫したような会話にダグラスが割って入った。

「へっ……？」

ライカが目を丸くして泉とダグラスを交互に見やる。

「お前らがいるから当分は大人しくしてるよ」

「!？」

ダグの言葉は本当なのか!? ライカは開いた口がふさがらなかつた。

「珍しい人種だな」

「お前が相手でもいいぞ」

ニヤリとされてライカは一瞬ぞわっとした。

こんな奴に狙われたベリルも可哀想に……ライカはしみじみと思つた。

「さあ着いたぞ」

車を駐めて外に出る。活気のある小さな基地といった処か。ベリルが要請した傭兵たちだろうか、見える人は全て武装している。

「ハイ! マイケル」

ダグは何人か見知った相手に挨拶を交わす。

ライカはベリルの処に来て間もないため、こういう集団での作戦に参加するのは初めてで目の前の光景に少し戸惑った。

「……」

大勢の人間が行き交う——ライカは改めてベリルの言葉を噛みしめる。

『一歩間違えば仲間を殺してしまう』

誰かを殺してしまうかもしれない恐怖……そうならないためのトレーニング、訓練、記憶、知識。

俺は今まで何をしてきたんだろう……ただオヤジの手伝いをしてきただけだったんだ。それで一人前になれると思ってた。でも違うんだな……

## \*才能

しばらくしてベリルが到着した。

「ベリル！」

「久しぶりだな」

口々に声を掛ける男たちにベリルは手を挙げて応えた。今回集めたのは30人。集めたデータからベリルが計算して出した人数だ。

「ここで軽く作戦を立て移動。移動した先で最終的な決定を出す」  
地図を広げながらベリルが説明する。

「この建物は何かの施設だったのか？」とメイヤー。

「公会堂だったらしい。10年も前から使われていない。そこを奴らは隠れ家としたようだ」

「ロッシュが捕まったのなら移動してるんじゃないか？」とトマツク。

「リアンナがロッシュが捕まったと知らされてすぐ、傭兵を雇って監視させているらしい。それだとまだ移動はしていない」

それに何人か口笛を鳴らす。

「さすがロッシュの娘だ」

「今回はロッシュ救出と彼の依頼を同時に遂行する。気を引き締め  
ていけ」

聞いて全員移動を始めた。

ライカはベリルから荷物を受け取る。

いつもならベリルから渡さなければ何もしなかったのに自分から荷物をすすんで取りに来た。

車に乗り込むとライカはすぐにバッグの中を探り出す。そして武器を1つ1つ取り出して、何やらぶつぶつと独り言を言っていた。

「ライカ」

「何？」

ベリルはそんなライカに数枚の紙を手渡した。

「アンデルセンとよく組む奴らだ。覚えろ」

「15人？」

仲間は30人近くいる。パーティ戦に慣れていないライカには敵の顔を覚えてもらう方が味方撃ちを防げる。

ライカはすぐに記憶を始めた。

「僕は覚えなくていいの？」

「お前はライカの後で見せてもらえ」

ダグラスはそれに怪訝な表情を浮かべた。

ライカの後って……そんなのいつ回ってくるか解らないじゃないか。

「はい、ダグ」

「え!？」

まだ10分くらいしか経ってないよ!？ 驚くダグラスにベリル

は小さく笑った。

「どういう事？」

シャワーを終えたダグラスがベッドで銃の手入れをしているベリルに訪ねた。

「何がだね？」

ダグラスはシャワールームにいるライカにクイと頭を向けて示しながら発する。

「敵の顔だよ」

「あれが本来のあいつだ」

言われて少年は眉間にしわを寄せた。

「奴は要領が悪かったただけだ。向上心さえ出ればちゃんと出来る」

「ベリルはそれに気付いてたの？」

「おや、気付かなかったのかね？」

しれっと答える。

「はーさっぱりした」



相変わらずオヤジ臭い物言いですつきりした顔のライカが出てきた。

「ライカ」

「何？」

「買い物を頼まれてくれないか」

「いいよ何？」

「9ミリパラベラム弾を3箱、50口径AE弾を2箱」

「OK、服着てすぐに行く」

着替えるため別の部屋に向かったライカをダグラスは啞然と見つけた。

「な？」

とベリルは笑って言った。

「……」

“ な？ ” って言われても……

「お前は天性のものがあるがライカは努力型なのだ。1つ1つ、しっかり覚えたり見たりする事で上達する」

今度はナイフを取り出し刃を確認しながら応える。

「……」

このままだとすぐに追い越されてしまう……ダグラスは慌てて敵の顔を覚え始めた。

## \*監視

ベリルたちは空路で現地へ飛んだ。

「……」

ライカは何か落ち着かない様子でそわそわしている。

「どうした」

そんな彼にベリルが無表情に問いかける。

「ファーストクラスなんて初めて乗った」

もの凄く高いんじゃない……

「持つてる者は使わねば経済は回らん」

「ベリルは金持ちだもんね」とダグラス。

「正当な金額をもらっているだけだ」

確かに彼が特別高額という訳ではなく依頼数が多いというだけである。もちろん依頼主の中には高額を支払う者もいるし相手を見て金額を決める事もある。

「っていうか……」

「なんだ」

「よく武器を機内に持ち込めたよな」

ベリルのバッグにライカは目を据わらせた。

「この航空会社は馴染みだ」

初めの頃は隠し持っていたが、その時に飛行機がハイジャックされてそれをベリルが助けた事から彼は特別扱いとなったのだ。

そうして彼はこつこつと顔を広げているのである。

現地に到着するとすでに簡易基地が設置されていた。活気に溢れた雰囲気ライカもダグラスも自然と笑みが浮かぶ。

「ベリル」

泉が彼の姿を見つけて呼びかける。

「今回は“リリパット”にも要請したのか？」

「相手が相手だからな。彼らにも協力してもらった方がいい」

初めて聞く名前にダグラスもライカもいぶかしげな表情を見せる。

「義賊の事をそう呼ぶんだ。ベリルはリリパットたちにも顔が広い」  
一息ついて一同が部屋に集まる。

「……」

しばらく見回したベリルは決意したように切り出す。

「今回の作戦には、リリパットから2人協力を仰いだ。メロールとアルフレッド」

紹介された2人は1歩前にでて軽く手を挙げる。

「相手はシーフ寄りの傭兵だ。彼らの意見をよく耳にして欲しい」

「アンデルセンはよく知っている。我々とは敵対関係にある奴だ」

アルフレッドという男が一歩進み出て発した。そのあとをメロールが続ける。

「彼に関する事は何でも聞いて頂戴。我々が知る限りの情報はお教えするわ」

そして本題に入る。部屋の真ん中に設置されている大きめの簡易デスク。そこに広げられた見取り図を一瞥し皆に顔を向けた。

「公会堂だが……さて一体どこに集まっていると思う」

ベリルが訪ねるとあちこちから一斉に見取り図に指が差された。

「ではここだと予想しよう。どう動く？」

最も多く指の差された部屋を確認し再び問いかけたベリルに1人の傭兵が応える。

「まず1チームが潜入して進入路の確保かな？」

「現在トマックに監視している者と合流してもらっている。そろそろ連絡が来る頃だろう」

言ったベリルのすぐ後に無線から声が響いた。

＜ベリル。今、合流した＞

「様子はどうか」

＜雰囲気からして……奴らが集まっているのは中ホールっぽいな＞  
それを聞いた数人がガツポーズした。

<外を監視してるのが……約3人。巡回するのはおそらく4人>  
「ふむ……」

残りは待機と捕虜の監視と指示か……聞きながら見取り図を眺める。

「これは何かしら？」

メロールが見取り図を指さす。

「控え室？」

「トマック。中ホールの南にある部屋は見えるか」

<ああ、見えるが……何か置いてあるぞ。そんなに大きくない箱だが、随分と嚴重そうだ>

まさかそれが秘宝『神の子』……？

## \*敵

作戦会議を一端中断し休憩に入る。

「ベリル」

喉を潤しているベリルのもとにメロールが声をかけた。

「久しぶりね」

「元気なようだね」

「今回の作戦。どうなの？」

メロールは率直に訪ねた。ベリルはそれに表情を少し曇らせる。

「わからん……ロッシュは賢明な男だ。相手を刺激することは無いと思うのだが」

「まさか、彼を殺したり……してないわよね」

「殺せばどうなるか解らない奴ではなからう」

「だいいのだけど」

「今の、どういう意味？」

メロールが離れたあとダグラスが近寄って問いかけた。

「ロッシュを殺すという事は我々傭兵全てを敵に回すという事だ」

「!？」

「戦闘で死ぬなら納得もする。だが、捕虜にした相手を殺すのは外道だ」

それを我々が許すと思うかね……？ その目には怒りが見て取れた。それだけは決して許さない……ベリルがまれに見せる冷たい瞳が敵に向けられている。

「……」

相手は絶対に勝てないな……ダグはそう感じた。彼に睨まれて逃げ延びた相手はいない。

「トワイト大丈夫か？」

「ああ、なんとか」

ロッシュたちは秘宝の奪還に失敗しアンデルセンたちに捕まってしまった。

そのまま拘束し放置して移動するのかと思えば、彼らは一週間経っても移動する気配を見せない。

何故だ……？ 何を待ってるんだ。こいつらの行動は予測しづらい。そのために捕まってしまったのだが……

「！」

すると奥から声が聞こえてきた。語気が荒い、何に怒ってるんだ？ 「まだ経路の確保が出来んのか！？」

「すまん、逃走ルートがすでに遮断されているんだ。傭兵たちが監視している」

「！ なんだと……？」

髭を蓄えた体格の良い40代半ばの男が怪訝な表情を浮かべた。

黒髪は癖毛でブラウンの瞳と威厳のある顔立ちだ。

そんなに多くの傭兵を動かせる奴が存在するのか？ その男、アンデルセンは腕を組んで思索した。

「！ まさか奴か……いや、まさかな」

「どうした？」

「なんでもない。とにかく、どうにかしてここから脱出しないと」顔を知られている彼らにとって捕虜を殺す理由は無い。すでにロッシュたちの存在はそこら辺のテーブルや椅子と同じだった。

なるほど。奴らの逃走経路を誰かが遮断しているのか……聞き耳を立てていたロッシュが納得した。しかし……

それは数百人単位で人を動かすという事だ。そんな規模を動かせる人間などいたのだろうか……ロッシュは一瞬、脳裏に過ぎた人物を振り払う。

まさか奴が来るハズがない……俺は奴と喧嘩別れしたんだからな。

それは数年前の事——ベリルの計画にロッシユは異議を唱えた。犠牲者が出るかもしれない計画だった。ロッシユはもつと確実な作戦をと彼に訴えたが、ベリルはこれが最良だと言った。

それ以来、彼はベリルとは組んでいない。

後に聞けばその計画で犠牲者は1人も出なかったらしい。だが、それは結果論だ。犠牲者が出るかもしれない作戦を黙って見過ごす事は出来なかった。

いや、解っているんだ……あれが本当に最良の作戦だった。俺は奴の才能に妬みを抱いている……年は取りたくないものだ。

こんな卑屈な人間ではなかったハズなんだがな。何もかもが妬みの対象なんだよ、お前は……とロッシユは深い溜息を漏らした。

捕まるってのは性に合わんな。考える時間がたつぷりある。とにかく、そんな俺の考えを悟っているあいつが俺を助けになんて来るハズはない。

しかし、助けようとしている人物は確実に存在する訳だ。その時までなんとか体力と氣力を温存しておかなくては……最低限の食事しか与えられていないロッシユたちは半ば氣力が途絶えそうだった。

## \*全速力

細かい作戦を打ち合わせし終えたベリルたちは遂行の日時を二日後の深夜1時とした。公会堂のある町は数年前に住民が他の街に移転し誰もいない。派手にやれるというものだ。

「今回は殲滅戦と思ってくれていい」

「！」

それに一同はざわつく。

「無理に相手の急所を外す必要は無いという事だ。何か不満な点があればいつでも連絡してくれ」

言って基地をあとにした。アタックポイントはここから数百キロ離れた町だ。今日中に移動を終え数キロ離れた地点で待機する。

移動中もライカは色んなデータを1人ぶつぶつ言いながら見つめていた。これが彼の覚え方なのだろう。

正直、ダグラスが驚くほどライカの上達振りは凄かった。人とはこんなに変わるものなのか……と感嘆せずにはいられない。

ライカが見ているデータはベリルが彼のために作成したもので、彼が覚えやすいように書かれている。

彼がいつか変わるであろうとベリルはすでに彼用のデータを作成していたのだ。

むしろそっちの方が感心するよ……ダグラスはベリルを見てそう思った。

車の中で夜を明かす3人。

「！」

ふいにベリル側のドアのガラスにノック音。

覗くとそれは泉だった。ライカとダグラスを起こさないように静かに車から出る。

「どうした」



「いや、ちよつとな……」

言い出しにくそうにしている泉の言葉をベリルは星を見つめて待っていた。

「あのよ……あの2人。正直、お前の目から見てもどうなんだ？」

「どういう意味だ」

「心強い仲間が増えるのは願ってもない事なんだが。中途半端な奴だと……さ」

泉は最後の言葉を濁した。それにベリルは小さく溜息を漏らす。

「素質がなければ育てたりはせん」

「それを聞いて安心した」

朝——起きて顔を洗うベリル。

ピックアップトラックの荷台には必要最低限の水と食料を積んできている。

「おはよ」

眠い目をこすりながらダグラスが車から出てきた。

「ライカは？」

「ん、他の仲間たちと話し合いをしているよ」

ベリルはそう言って向かった方向を軽く示した。それにダグラスは怪訝な表情を浮かべる。

「話し合い？」

「奴はパーティ戦は初めてだからな、仲間たちと色々会話する事で意思の疎通が取りやすくなる。相手の呼吸が解るからね」

ベリルはライカがいるであろう方向に視線を向け目を細めた。

積極的に会話するようにライカに勧めたのだ。ベリルの弟子という事で仲間たちも興味津々で彼に話しかける。

独り立ちする時、顔を知られていれば今後にも役に立つ。

ライカは今までしてこなかった事を全速力で覚えようとしていた。

「私から離れるのも時間の問題だろう」

ぼそりとつぶやいた。

## \*作戦確認

ベリルは、とあるグループの元へ来ている。一番先に施設に突入するチームだ。

「最終確認を行う。何か質問は？」

それにロイスという男が軽く手を挙げた。

「あのよ……殲滅戦の意識でいいって言ったが。なんでだ？」

「アンデルセンという男は容赦が無い。相手が赤子でも躊躇無く殺せる者なのだ」

それを聞いた先発隊は眉間にしわを寄せた。

「ロッシュたちのチームは6人。彼らを救出するには相手の命を考えては行動出来ん」

そういう相手ならこちらもそういう意識で動く必要がある。

「だからといって無理にトドメを刺す必要は無い。武器を全て奪ってから次の行動に移ってくれ」

「解った」

先発隊は1チーム3人が3方向から突入する。

現在3方向からそれぞれ監視していて先発隊の突入にも彼らの情報がりアルタイムで示される事になっている。

ベリルは次に、後続のチーム各々に確認作業を済ませ決行3時間前にヘッドセットの最終チェックを行った。

決行1時間30分前……いよいよアタック・ポイントへ移動となる。車で100m付近まで近づきその後は徒歩でポイントに待機する。

緊張するダグラスとライカにベリルは「落ち着け」と軽く肩を叩いた。

「……」

冷静な表情で周りを確認するベリルをライカはじっと見つめた。

そうだ……オヤジもいつも冷静だった。と思い起こす。

『冷静にならなければ窮地に直面した時、正しい判断が出来ない』  
セシエルはライカにずっとそう語っていた。

傭兵でありハンターであったクリア・セシエル——今、その忘れ形見であるダグラスとライカはベリルの元にいる。

まるでセシエルの霊魂が導いたかのように……たった2度の出会いがセシエルとベリルの間に絆を生んだのかもしれない。

そして、その絆は次に受け継がれていく。

待機しているダグとライカは固唾を吞んでその時を待っていた。

自分の心臓の音がうるさい。

手が小刻みに震える。

「落ち着け。指示をしっかりと聞いていれば心配する事は無い。緊張する必要は無い」

ベリルは優しい口調でささやく。

「う、うん……」

「そうだよな……」

緊張を隠せない2人の頭を引き寄せてコツンと自分の頭にくっつけた。その温もりが伝わってきて何故だか無理な力が抜けていくように感じられる。

「周りばかりに気を取られるな。無理に攻撃しなくとも良い仲間から離れないようにする事を重点に置くのだ」

ベリルの落ち着いた声と、その笑顔でダグとライカはホッとした。

## \*決行

深夜1時——先発チームが一気に突入する。

「！　なんの音だ？」

「まさか襲撃？」

その音にアンデルセンたちは銃を構える。

「落ち着け！　建物の構造を熟知しているこちらが有利だ。シミュレートしているようにやればいい」

アンデルセンが仲間たちをなだめると建物内の明かりという明かりが全て消されていく。

完全な闇……互いに暗視スコープを装着し静かな戦いが始まった。

「始まった」

ダグラスとライカはヘッドセットから響く声と建物から届く音に固唾を呑む。ライカたちはベリルのチームにいてほぼ最後に突入する。

<小ホールで戦闘中>

「相手の数は」

ヘッドセットからの声に問いかけるベリル。

<多分5人>

「1チームそちらに向かっている。それまで持たせろ」

<解った！>

<エリアC制圧>

それを聞いたベリルは最後のチームに突入指示を出す。

いよいよだ！——ダグとライカはライフルを握りしめてベリルの後に続いた。

「……」

少しずつ進む。ベリルたちのチームが入る頃にはすでにほとんどの場所が制圧を終えていた。

しかしまだアンデルセンとロッシュたちを目視確認していない。

「！ やっぱりベリルか……」

アンデルセンはいくつか設置している監視カメラでベリルの姿を捉えた。苦い顔になる。

「まさか奴が来るとは」

あごひげをいじり思案してマイクを手に取り指示を出す。

「“死なない死人”だ。プランBでいく」

それを聞いた仲間たちは一斉に散り散りになった。

「神の子よりも貴重なモノが手に入るかもな……」

ディスプレイに映し出されているベリルを見つめて口の端をつり上げた。

## ＊戦闘開始

<例の部屋に来たぞ。侵入するのか？>

「だめだ。その部屋には入るな」

ベリルの指示にそこにいた仲間が怪訝な表情を浮かべる。

「相手がシーフという事を忘れるな。そこにメロールはいるか？」

<解ってるわ。調べてから入る>

「ブービートラップが設置されている可能性がある。こちらの動きがもっと速く察知されていれば、あちこちにトラップがあっただろうがね」

いぶかしげなライカたちを一瞥し説明を加えた。

今回は相手が相手なだけに、いつもより慎重かつ迅速に行う必要がある。そのため、先発隊には“リリパット”のメロールとアルフレッドを2チームのリーダーとして編成したのだ。

「いよいよ、来ましたね」

ロッシュの仲間がぼそりと彼につぶやく。

「ああ……」

だが、勝てるのか？ 相手はシーフだ、傭兵に太刀打ち出来るのか疑問だ。

その時——部屋の灯りが突然点灯した。

「う……っ!？」

その光に一瞬、目を奪われる。

「無事なようだな」

「？」

聞き覚えのある声……ロッシュはまぶしさから解放されて声の主に目をやった。

「!？」

その人物に目を丸くする。目の前にはベリルが1人、ハンドガン

を手に笑いかけていた。ロッシュは一瞬、安堵の表情を見せたがすぐに険しい目を向ける。

「俺の無様な姿を笑いに來たのか……？」

「！　ロッシュ？」

仲間は彼の言葉に戸惑う。この2人の間に何があったのは解らないが仲違いをしている事だけは窺えた。

「まあ、そう言うな」

そんなベリルの背後から銃を構える音――ベリルは持っていたハンドガンを捨て両手を肩まで挙げて振り返る。

アンデルセンがライフルを向けていた。

「死なない死人……」

「色んな名前が付いてるな、私は」

ベリルは目を据わらせて薄笑いを返す。

「……」

アンデルセンはいぶかしげにベリルを見つめた。

こいつの雰囲気は掴めない。何を考えているのか解らない……ベリルを前にして初めて背筋から冷たいものが流れた。

あれだけいたこいつの仲間はどこにいった？　30人はいたはずなのに……何故こいつは今、1人なんだ？

「不思議そうだな。お前が1人でここにいるという事に、私もおかしい感覚なのだがね」

「！」

それにロッシュはハツとした。そうだ……アンデルセンの仲間はどうした？

「他の仲間に、私の仲間を攻撃させるように指示したのだろう。彼らの動きを我々が察知するのは難しい」

## \*1枚上手

銃口を突きつけられながらもしれっと応える。

「確かに本来ならこのまま我々が負けていただろうね。そちらが15人、こちらが30人でも慣れていないシーフを相手になるとそう簡単にはいかない」

そしてさらに付け加える。

「シーフ相手に我々だけで来ると思うかね」

「何……？」

アンデルセンは眉をひそめた。

「！　そうかつリリパットを！？」

「もう遅い。制圧完了だ」

アンデルセンは小さく舌打ちした。

「貴様は一体、何だ。一体、何なのだ」

「さあね」

とぼけた表情のベリルを見据えてアンデルセンはライフルを構える。負けは確実なのにアンデルセンの顔には諦めた表情が無い。確かにロッシュたちを人質にすれば彼だけでも逃げられるだろう。

だがそれはベリルを倒せれば……の話だ。

「俺は秘宝と死人を手に入れる」

口の端をつり上げてアンデルセンは静かに発した。

「私もか？　随分と欲張りだな」

「お前を欲しがっている奴らは大勢いる。高値で売れる」

男が引鉄を引く瞬間――

「！　避けるベリルっ！」

ロッシュが叫んだ。

「ぐっ……」

「ベリル！」

撃たれた衝撃でベリルはロッシュの足下まで飛ばされた。



「相変わらずの麻醉か」

「ベリル！」

心配そうに上から見つめるロッシュに小さく笑う。

「怪我は、無いか？」

「ああ……無い」

聞きながら上半身を起こしてロッシュに寄りかかる。

「まったく……お前は、頑固だよ」

「悪かったな」

「そこが、お前……の、いい処でも、あるんだがね」

意識が遠のいていく中、言葉を絞り出す。

「しっかりしろ！」

「無茶、言うな……この量。像用だぞ。普通の人間なら、死ぬ」

クク……と喉の奥から笑みをこぼし声を低くした。

「私の事は、気にするな……何か、転がってきたら……目を閉じろ」

「え？」

ベリルはそう言って眠りに落ちた。

アンデルセンは溜息を漏らしベリルを捕らえたという感情から自

然と笑みがこぼれていた。しかし――

“カンツコロコロ……”

足下に何か転がってきて視線を落とす。

「！ 手榴弾！？」

気付いた瞬間――まばゆい光が充満し目の前が真っ暗になった。

「うっ！？」

驚く男の手から何者かが銃を奪い両手を後ろに回して縛る。正常

な視力を取り戻した時には目の前にベリルの仲間たちが立っていた。

「これはどういう事だ……」

状況を把握出来ないアンデルセンに泉はしゃがみ込み笑顔で発する。

「初めからあんたが麻醉を使うって知ってたんだよ」

「なんだと？」

ロッシュたちを解放しベリルを抱きかかえるダグラスとライカ。

「お前が獲物にどん欲なのは知っている。そして自分に自信がある事もね。だからオトリを使ったのよ」とメロール。

「オトリ……」

聞いたアンデルセンはがっくりと肩を落とした。

## \*取るに足らない

「ベリルはどれくらいで目を覚ます」

ロツシュは泉に問いかける。

「さあなあ……像用だがベリルは代謝が早いから1時間から2時間とところだろう」

「……そうか」

「秘宝があつたわ!」

メロールが宝石を見つけてロツシュに手渡した。

「“神の子”か……あそこにホントの神の子がいるのにねえ」

泉は薄笑いを浮かべて心配そうに見つめるライカとダグラスに寄り添われ未だに目を覚まさないベリルをあごで示す。

ロツシュはそれに無言で宝石を握りしめた。

数時間後――

「う……」

「ベリル!」

「ベリルっ」

初めに目に飛び込んできたのはダグラスとライカの顔。作戦が成功したと感じたベリルは笑って起き上がる。

「お……?」

ロツシュがその視線に入った。

「どうして助けに来た」

「当り前の事を聞かれてもな」

苦い表情を浮かべて問いかけるロツシュに彼はしれっと応える。

「!？」

「まさかあんな口ゲンカだけで私がスネてるとでも思っていたのかね?」

「それは……」

「私には取るに足らない事だ。お前が言いたい事も解る。多くの意見がありそれに対する作戦や指示もあるのは当然のことだろう」

同じ志であれば仲間だ。共に戦い同じ意志を持つ……いがみ合う意味など、どこにある。

「ククク……はっはっはっ！ 確かにそうだ、俺は随分と1人で意固地になっていたらしい。あれは俺が悪かった。あの作戦は正しかった」

笑顔で言い放ったベリルにロッシュは呆れて溜息を吐き出した後に高らかに笑った。そんな彼に笑顔を返しライカの背中に手を添えて前に出るように促す。

「ロッシュ、しばらく彼の面倒を見てみないか」

「!? ベリル!?」

「こいつは……セシエルの拾い子か」

## \*最終話／別れ

「私だけでなく他の傭兵の技術も学べ。彼は信頼出来る者だ。傭兵としての力量も申し分ない」

驚くライカに優しく微笑みロッシュの前に促す。

「素晴らしき傭兵にそう言ってもらえると嬉しいよ」

ロッシュはベリルに対する負の感情は綺麗に無くなっていた。素直に彼が素晴らしい存在だと認識出来る。

「……っ」

「今のお前なら十分に彼の役に立つ。そしてセシエルの意志を継ぐにふさわしい者に近いうちになれるだろう」

突然の事に戸惑うライカをなだめるように発した。

「！ オヤジの……」

そして少年は戸惑いながらライカの前に立ち喉を詰まらせる。

「ライカといて楽しかったよ。いいライバルになれた。離れていてもライバルは変わらないからね」

ダグラスがそう言って彼に手渡したものは……

「！ これ……」

それは小さなナイフ。ダグラスがずっと持っていた大切なナイフだ。ダグラスはその後の言葉が出なくて涙をこらえるようにベリルの後ろに身を隠した。

「うん。ありがとう」

ライカもそれだけ言うのが精一杯だった。

ライカは助手席から見送るベリルの姿を焼き付ける。

「……」

俺は立派なハンターになるのが夢だった。ベリルはその手助けをしてくれたんだ。本当の両親の顔はもううつすらとしか覚えてないけど、セシエルとベリルの記憶があればそれで十分だ。それ以外に

望んだら贅沢者だよな。

次に彼と再会する時は、一人前のハンターになったのだと胸を張れるようになりたい。そのときと彼なら、柔らかな笑顔で「良かったな」と返してくれるだろう。

この5年後——さらに多くの技を学ぶべくダグラスもベリルの元を旅立つ。

セシエルの忘れ形見。その2人にベリルはかつてのセシエルの面影を追った。

「これで満足か？ セシエル」

ベリルはオーストラリアの荒野に1人佇む。

「楽しかったよ。お前にしてはなかなかの贈り物だった」  
乾いた風に小さく笑って発した。

END

## **\*最終話く別れ（後書き）**

\*お付き合いくださり、ありがとうございます。  
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6518s/>

---

天使の残像

2011年8月30日03時24分発行